續千載和歌集 下

和
28
2−2

特別
イ4
3163
16(2)

續千載和歌集巻第十一

恋哥一

女につかはしける　　兵部卿元良親王

あま雲のよそに見えける峯にしもたかくも思ひを思ふ哉

久安百首哥に　　皇太后宮大夫俊成

思ひやるそのたらちめの思ひにはいはぬ物からあはれなりけり

家の百首哥合に初恋　　後京極摂政前太政大臣

しらさりし口恋せしやなれぬらん人のゆかしきの露ぞ

嘉元百首哥たてまつりし時　　権中納言公雄

限あれは五月の田子の袖にしもおりたちぬへき恋路なりけり

初為縁恋といふ事を　　後宇多院御製

思ひそむ心の色もときはきのはなにかはらでたのみつる哉

百首哥めされし次に

山高み雲井にかかる瀧の糸のたえぬ思ひは人もしらなん

恋の哥の中に　　円光院入道前関白太政大臣

知らせはや初の浅き神にもかはらてつもる恋やしるらん

百首哥奉りし時　　前右大臣

[seal]

あはれなる我をそ頼め神代より久しくなりぬ行末とほく神代

弘安内裏百首に寄社

前大納言為氏

ゆくすゑはつかへむ神やまもるらむ代々のみかりの君をまもりて

題しらす

藤原盛徳

煙たつ塩かまの浦にすむ神のあらはす神の末そひさしき

前参議雅俊

かりそめに立よる神のたのみにも深きしるしをみつのみなせに

藤原忠家朝臣

えらひおく神の恵のたかけれは末の代まてもあふくなりけり

藤原重顕

あきらけき神のちかひにまかせつゝ世々にかはらぬ年

嘉元百首歌中神祇

昭慶門院一条

君守る神のちかひしふかけれは神の代よりもかはらさりけり

昭訓門院春日

君のみよをまもりきぬる神の代に頼みのこゝろ深きとそ

春日社にて読侍りし百首歌中に

前大納言為世

思ひおくみかさの山を仰きつゝ頼みし春日の神そまもらむ

嘉元百首哥奉し時　典侍親子朝臣

涙さへしのぶにもれて袖にかゝる思ひを人のあはれともみよ

題しらず　式乾門院御匣

年をへてつれなき人を恋ふる身の袖にしられし涙なりけり

千五百番哥合に　前大納言兼宗

今までの思ひのほかにながらへて又こひしさはいかゞなりけり

百首哥奉し時　前右大臣

ひとしれずおもふ涙のそでにもるあはれこゝろのいろに出けれ

恋の哥中に　中宮宣旨

たちかへる涙に人をしのぶとはいはぬものから袖のいろかな

贈従三位為子

忍ぶるもこのよのちのちぎりあれば人をうらみじ涙せきかね

賀茂師久

色にいでしそのかみなれど玉ちるゝけても人はしらぬ物ゆへ

平親清女

思ひたえはてもあふ涙を袖よりほかにもらさぬぞうき

平重村

忍びつる後をとがめて袖にはやしたふ涙のいろぞみえける

権律師實性

涙をばしのびもあへずつゝめども人にしられて袖ぞくちぬる

寄郭公恋といふ心をよみ侍る
惟宗光忠
ま秋の夜はいたつらに時鳥まちてそ人に今宵もしらすなる
寄蛍恋を
従三位為信
今はとり思ひはこれとみえて神くつきぬの蛍なりけり
藤原為道朝臣
よそにのみ思ふ蛍の光ゆへ身にていそ思ふ飛も見え迷
津守国夏
為とも宗へ人を思ふとて蛍よりまさるもえかね
数しられ
藤原信実
忘れはてぬ山よりの今宵のもとにありそて緑なるかな
後法性寺入道前関白家歌合に
基俊
今はらぬ思ひそこれは猶のつもるの恋の色を
恋の歌の中に
待賢門院堀河
よし堀り岩もしの水の行やと思ふ色をいそかるらん
源家長朝臣
忘れなる岩の仇関の行そてのよそに色なく恋をこ流るゝ
弘安百首哥奉りける時
前僧正実伊

奥山の岩かきこほりとけ初てやまたにおとこそまされ
述懐の心を　亀山院御製
あさせやいはもる水のなかれてもたえぬと心のあさからぬかな
兼道朝臣
ともしひもまたふかきとは色の山の下水
源兼氏朝臣
住吉の浪の月きて岸まされやへたてかれてなかくたえぬは
殷富門院大輔
今日はまたなにとかへりや浪をせぬ人のかよひち
宝治百首奉りける時寄衣恋
常盤井入道前太政大臣
いく世へんなれこし人の桜花さてのみ心の花はちらさし
影もなかれん
あまをとめや浪の今は花の井のかすみなる色に出て
みか月のはに秋の色こそ葉のかけもなくさむかな
つらしとも
清水納言
はれやらぬ心の人の中に友をもまたいかてかくれみちなき
述懐をよませ給ける
今上御製
かすかなる道の辺にて友をもたのみけるものかはかな

宰相典侍

ちきりしな草葉の露にやとる月かけの光はかなき世にすみけるを

百首歌奉りし時　太政大臣

かはらしなよしのの奥の雲井まてかゝるなかれの神の白雲

寄池恋を　法皇御製

池水の底の玉藻のみかくれてあさからぬ心をたれかしるらん

題しらす　前大納言為家

うきことを昔の秋にみせなからにかくれて人を恋わたるかな

今上御製

まてしはし人の心とたのめともいさとて月日のつもりぬるかな

正三位為實

かくとたにいはての杜の木枯しよそてこかるんとのはの色

神無月のはしめより女のもとにつかはしける

津守國基

思ふこといはての杜のこのしたにいろのちりしはまたもあらなん

名所恋といふことを

前中納言為方

恋しさはひとつ心にしらせはやいはての杜の森の下露

百首歌奉りし時　津守國冬

秋のつゆみえしの杜のしのはれてえたしけても恋しき袖の露

弘安百首歌奉りし時

入道二品親王性助

祢かひのいはせの杜のいはれは神の心をまつたのむかな

題しらす　新陽明門院兵衛佐

思ふあまりいはぬいはせの杜の露そらにしられて袖もぬれけり

寄若菜祇といふことをよませ給うける

高階宗成朝臣

消やらぬ雪間のわかなたをりてそ神のめくみをまつはしめ世に

百首歌よみ侍りける時

前関白太政大臣

和歌の道にこれの住吉の神ならはそそのかす人もなきかな

慈鎮歌の中に

前内大臣　通

今は又神のみやこのいはその山のしつく露

よみ人しらす

いそくれはさひしからてもかはりぬる神のこゝろそ

宝治百首歌たてまつりける時寄瀧祇

後

深草院少将内侍

なかはいはてそたのむ神のみまもりなむ

題しらす

中臣祐臣

幾年か神のみまへにたのみきて猶さりかたき身の祈

前僧正公朝

やほよろつ神のみまへにたのみつゝ祈るかひある世にこそ

源兼氏朝臣

今ぞしる下の浦よる網のめのもらさぬちかひひくこゝろかな

藤原為親朝臣

いかはかり神もあはれと思ふらむ涙の河にしつむ我身を

式部卿親王家にて寄河懐旧といふことを

人はまたしらぬ涙の河をさへ神そわかれの末もしるらむ

平時敦

弘長三年九月盡日内裏にて三首歌講せられける時おなしこゝろを

権中納言公雄

世をすくふ心ありてそあらはるゝ涙の川は神もうけくそ

題しらす

藤原頼泰朝臣

思ふ事涙の川にいひかへしつくりいかにすむ影

百首歌奉りし時

大将門侍

いかにして捨てぬ人を身にかへてせめての心まよひぬるかな

信人名處といふ心を

式部卿久明親王

かゝる人のたつる名にしか川もやすらさへぬ袖そしらるゝ

題しらす

平政村朝臣

ことゝはん浦の煙もおもはれて我身をくゆる心のゆくへはてなき

宝治百首歌奉りける時寄煙恋

祝部成重

しらしなのおもひと見えぬ富士の煙はたえもせよ
かしと

建長三年九月十三夜十首歌合に同

前大納言為家

名にたかき浮島か原に見えし富士の煙の空にきえぬる

恋歌中に

高階宗成朝臣

恋ゆへに身の思ひはたえぬ煙とも[illegible]なき

平維貞

立そむる浅間の煙の煙とも[illegible]

藤原基明

秋のりこれて五十なりし恋の煙の上そわたりし

藤原經清朝臣

つきもせぬ思ひにむせふ富士の煙のたえぬも

藤原為定朝臣

下もえの思ひの煙の富士のねに[illegible]

前大納言為世よみ侍りし春日社三十首歌

旅

律師妹

立のほる煙に大の思ひの[illegible]

女御徽子女王

ことのねに峯の松風かよふらしいつれのをよりしらへそめけん

名所百首歌たてまつりける時

僧正行意

たち帰る上鹿の声の夕暮に金ゐにきこゆ人もなきかな

題しらす

躬恒

今よりも今はわかれしき霞野の山ふきも花のさかりに

西宮左大臣

宮こ人はきゝもしるらむ三輪の山ほと井ともなくなくちらすせん

天徳四年内裏歌合に

中務

むはたまの夜のまにちりし花よりも我身ははかなき色そみゆる

読人しらす

ゆくもかへるもしかすかの嵐にはかきくらしつゝいつそなかれん

今出川院近衛

思ひやる心ははるかにきく物をいかにかいさめ霞のうちに

後二条院位の御時三十首歌の中に名をおもふ恋をよみ侍ける

贈従二位為子

ひとりねに我恋しなはなにとかや人もつゝまて命ならんや

題しらす

思ふ人後にかゝる命のかなしさは世にすみて思ひしられた

能誉法師

しらせてのつらさそ世にみえてけりやいかにしても物やおもはん

法印円伊

いまはたゝ命ならぬ命しもしらせて後はなくさめやせん

左京大夫實任

露とたにきえぬこそあれ身の中のおもひのほかの身をいかにせん

讀人しらす

百首哥奉りし時

従二位宣子

りしきしく雲ゐの空も袖のみしくれて物をおもひそめけれ

嘉元二年内裏哥合に寄言中恋

前関白太政大臣

いかにせんつらさも人の世に世にとはれぬを人の心ならすは

恋哥の中に

平政長

うしとてもおもひはかへぬ名とりかはりはてぬる世の憂さ

正三位為實

ちかひても猶たのまれぬ人の心のかはりやすき世の憂さ

弘安百首哥奉りける時

入道前太政大臣

きみとわれたかま山の峯の雲よそにのみして立そふりなん

宝治百首奉りける時寄雲恋
花山院内大臣
恋しさはよそに見えけり雲の色のつゝまぬ涙やさそはれん
同しこゝろを
按察頼範女
こゝろからなかめわひぬる夕暮の雲にわかるゝ人のつらさを
弘安百首奉りける時
入道前太政大臣
恋しさはよそにも風の身にしみてたえぬおもひはやむ時もなし
恋の歌中に
前関白家 押紙 二条
君ゆへに物思ふ人の是にもあるは数ならぬ身のうきよなりけり

百首奉りし時
従二位宣有
浪まよりかくるゝたかせのしほかせに夕浪よりも
影しらす
藤原雅朝臣
世をうみのみなとの能津にやよふ浦の月もなかめん
遊義門院
いつとなくおもひはてぬる浪の神よりそかくる
百首奉りし時
入道前太政大臣
なみこえし浪の風よりいつよりも袖のつゆもそふ身の上
題しらす
今上御製
君ゆへとおもふもはかなくさそひいまはよそにてはれにし衣そ

三条入道内大臣

法のこゑをきゝし嶺よりみちとせの袖のうへになれん

入道前太政大臣

西国へまかりし時

見わたせはしほ風よりもこえかゝるなみにしられて猶そこゆる

題しらす

法印頼章

みつかはのきしにさきける藤の花かけのしたにもなひく浪かな

權律師圓世

ゆきてみしたとへ物をも見山のさくらのちりしなからもふかき

源兼氏朝臣

いつまてかしゝみの浦のなみもさそふかせにかけるなしも

右京信隆

世をさらぬなけきのなかにたえてみしものをも月そあはれなる

權大納言兼基

うき中にかはらぬまゝやなかさんとけてそあはれ波と

寄山恋の心をよみ侍りける

山階入道左大臣

あはれにもひとつのみねをこえてしもかはるなみのこゝろこそあれ

旅後顕恋

従三位為理

あらはれしかけもいかにうつせみのかはらぬ恋のかたちなりけり

家歌合に恋

富家入道前関白太政大臣

秋思乃哀風にて菊玉すてハ露飛てれかりもられかり里

続千載和歌集巻第十二

恋哥二

題しらす

柿本人麿

奥山の木葉かくれ行水の音きゝしより常忘れす

よみ人しらす

名されは山のくちつゝきの露も君まちて免てき

兵部卿元良親王家歌合に

源宗于朝臣

今はよは定なき物を恨くらす時雨かな夜なとも

恋の歌の中に

源信明朝臣

いはぬまはまたしらせねとさりともと思ひしれるや今はなれ

崇徳院御製

わかれてはなけきの情のかゝりけるをとも袖のなくさまれせん

七夕によせて恋の心をよみ侍る

藤原範永朝臣

いとはん織女よりもさひしきは袖のなみたそ

人こそしらね五十年まちしわか身そ

後鳥羽院御製

稲の葉におく露の身なれはたのむの風にありとこそ

題しらす

つゐ恋ハ寝まくとよそのよりも世のみかは涙のかはりなり

弘長門院百首哥奉りし時寄水恋

前大納言為氏

思ひたえぬ心ハ見えし影そへてこそむすふらん山の井の水

不逢恋を

今上御製

涙川さえぬ中にハ塩ひまなきにつれてまつのあふせもなきものかハ

嘉元百首哥奉りし時秋のこゝろを

入道前太政大臣

身にあまる恵ハおもふやとへと雲ゐの月をなかめましかハ

ふかしらぬ人もあはれ

露ふかき人ハたれかハ分ゆきて紅葉の色を見んとすらし

邦省親王

松の葉のかはらぬ色を恨ても人の心ハ染かはりけり

中務卿宗尊親王

時わかぬ秋のちもちの紅しくれての色の花ふかくこそ染し

権少僧都澄守

さらぬたに宮田のよその秋原さへも霧も深さなかりせは

弘安百首哥奉りける時

二品法親王覚助

たのめやそのゝ花の陰の海に浪とよする袖のなれとも

題しらす　永福門院

明けてゆく色さへさむし北雲のむらきえてたなひく末も見え

弘安百首歌奉りける時　入道前太政大臣

空にたれ雲もなきよのみ月のさえて海こほる色の

百首歌奉し時　民部卿為教

忘し月のまつよひゆく雲あれやまつかひもなき空のはれ

寄夢中恋といふことを　権中納言為藤

長き夜の浦の煙の末もなくたえしと思ふに思ひもそまつ

弘安百首歌たてまつりける時　亀山院御製

富士の根の煙の末はたえてもなほ思ひのあとはのこるなり

千五百番歌合に　宜秋門院丹後

時しらぬ富士の煙のたえまなく思ひにもゆるわかみなりけり

題しらす　大納言経信

いかにせんしのふの浦のもしほ草かきつくしてもしらぬ心を

春宮傅師信

あつまちの浦の煙の末たえてそらにけふりの思ひをそしる

治承二年右大臣家百首歌よみ侍ける八幡宮に奉りける百首歌に

権大僧都公順

前してもわすれし思ひをつくしたく藻の煙とや

恋歌の中に　皇后宮兵衛督

伊勢の海のあまのつりなはたくなはにくるれはくるしきを
思ひて

為道朝臣女

恋ひしくりしん絲のまてもしまみとりて乃浦のかけ覧

藤原高季家

いつせんおもふて乃浦によする浪のよるたか人とみなと見え

平貞時

あさなゆふなよる磯のうつせ貝われてそ我は物思ふ人

藤原資明

うき世をはなれはてゝもおなしく浪のたつ海のなかそらき

名所百首歌奉りし時

正三位知家

松嶋やをしまの浦の世をすてゝみし神の袖にのこれと

影しらん

前参議忠定

塩竈やうらさひしき浦風にこゑあはれてとふ袖

弘安百首歌奉りし時

太宰卿隆博

思ひはかなくなき浦による浪と世をふくし袖にかゝれ物とへ

恋乃歌の中に

前参議雅有

あま衣たまきの袖のかはくまもなみのよるさへかりかねて

題しらす　為道朝臣

しらせやかへるなみかけて朝夕のよるさへ袖のかはくまもなき　藤原師光

金沢よあをうみの浦のあま人やたえまにこそは袖のかはくなるらん　法印定恵

年ふれとかはくまそなき涙にはくらへんかたのうらかなしさは　祝部成久

わかおもひは志賀津の浦のさゝなみやかたみにかへるてふ袖のしつく

百首奉りし時　関白内大臣

うきやいかに物おもふ人を海原のかたへなとてか袖のほすへき

題しらす　従三位親子

移ろひて袖のしつくをみすてたる人のうらみかなえなはすゑは　二品法親王覚助

なにはかりうれしも涙にたまる袖ならはすこしはさてやかはかん　永福門院小兵衛督

物おもふ袖ならはなれ露のほかにさこそはたゝあきの夕暮　為親法師

難波江やあしのうちはにぬれつゝおもふよさりのかはくまもなし

弘安百首奉りし時

権中納言公雄

難波江やあしの葦しも濁江も思へはおなし秋さそふらん

百首哥たてまつりし時

後宇多院御製

あはれ世のならひはかくそいにしへもあはれとはゆく年のなかり

二品法親王覚助

そのかみのよはひはこの葉にかくの命とはてこそすれて

太政大臣

おもひてとなるへき山の命とてはいかゝとへの程となん

恋哥中に

平宣時朝臣

おもふ事はかはりもせてそめしもみてはなのうきは

民部卿資教

あはれしらぬ後もつきぬ物ならはしきましにやみも道

権中納言實前

なからへて命のみこそうきよにもわすれぬとたへしもやまさる

百首哥たてまつりし時

昭訓門院春日

ありて世にあるへくもなくそのへの契のはてもたのまれ

寶治百首哥たてまつりし時寄橋恋

従三位為継

あふ事は恋の命をかけてみさへはしてふたのもしからん

題しらす　　祝部忠良

法にあふ身のうれしさを月日まて我身にあまるめくみなりけり

源俊定朝臣

あかすやはおもふ世のつきぬ年月を老ぬる命の程そしらるる

文永二年九月十三夜亀山殿五首歌合に

不逢恋　　善光園入道前関白左大臣

こひしなむとおもふよりの命さへいきてつれなき人そかなしき

前大納言為氏

恋わふる身のはてをそおもへつれなき命ありてそ頼みしらるる世をさて

平宗宣朝臣よませ侍し住吉社卅首

前に同心を　　法印定為

身にかへて命を惜む心こそいかにせむとは思ひたちけれ

題しらす　　法印長舜

恋わひてなき世の年をへて命さへいきてかひなき身とそなりける

法の海をわたすときくし大慈悲の舟をこそ年をへて待わたりけれ

春宮新兵衛督

年月は祈しかひのあらはれて人の心のつらさをそしる

藤原為藤

頼こし人の心のつきせぬを我さへいつのまにかよそにて

贈従三位為子

前權僧正雲雅

恋しさはいかにせよとて物ならはつまとられ人へところかなさけなし

大中臣爲貫

あまとはかゝるこのまゝ宿原うらしもみるを霧そこめつゝ

藤原爲長

思ひ数ゑはすてゝつまこふれはうきをへのあはれなるらん

權少僧都隆道

たえぬへき命なりせは行末をちきりてハ頼らくへやせん

法眼寧兼

後の世とちきりしことはいそかれてまつへん人の名はめくるとも

中務卿宗尊親王家哥合に

道法法師

あふ事はたのまれは玉のをのたえしも人をまてとこそなれ

法眼兼譽

恋哥の中に

あはてこそ命なからへてにたつ恋しなはあるへきかれ

律師宣平

恋しなん命なからへてもあらん後の人のあはれともこそ

藤原冬隆朝臣

こひしなはつれなき人もたえはてゝまさることゝそはかなかりける

後光明峯寺攝政家五首哥合に久恋

源親長朝臣

ほとゝきすなけゝる人の命をはあはれてさきたつものとこそきけ

恋哥中に

権大納言實衡

命こそつれなきものとおもひしかあひみてのちそ絶る世に

春日社によみてたてまつりける五十首哥中に

前大納言爲世

めくりあふ後にはしらぬ大方のこれのつくさむかきりいふそこゝろ

嘉元百首哥たてまつりし時

西園寺前

いかにせんわれてまちこしあふことを命にかへてしかへはも

百首哥奉りし時

六条内大臣

ふるをもおもはぬ人の命をはなかめしはてつらくとか年経しらん

後二条院御製

恋しなん命はさらにおしからてあはまく名をたてつるときくや

題しらす

従二位家隆

あつまちにけふもまたとも世をかけはからき憂世をさそふ人の命ならなり

弘長百首哥たてまつりし時、逢恋

衣笠内大臣

いそならてつはらりてあはぬ身をかへてなくさめときゝてあらん

恋哥中に

春宮大夫公賢

思ひあまりしても後はつらきものいのちをまつなきかさくらん

平宣時朝臣

後の世のためといひてそせましさてもやへのをしへなると

百首歌たてまつりし時　左京為定朝臣

世をすててこそいつきせぬ思ひのかたみよりつきなりけん

題しらず　仲家

睦ましき後の世をとふ心まてつきせぬにこそ世のうさは

嘉元百首歌たてまつりし時不逢恋　贈従三位為子

たのめおかぬ世をしていはなりそ契りしことをうらみはてなん

百首歌たてまつりし時　津守国冬

はくはしへぬとてもなくさまむやすこしいにしへの春

権中納言為藤

数かすをこえてかそふる年なれはいとゝふかくもなりにけるかな

寄国平恋といふことを

前大納言為氏

さゝ葉にかゝりてたのむ契りをも思ひのほかにわすれにしかな

題しらず　永嘉門院周防

またにみるかの橋のかけはしわれはつらきをいとふ世なれや

二品法親王家五十首歌に　前大納言為世

清まりける人をは玉ていの大かなはいふや神とこそみん

祈不老延年といふ心を

皇后宮

神垣やよろつの水もなのみしていくよの春をうつしもむらん

祈経年恋といへることをよませ給ける

後京極摂政

宇治川はむかしのなかれいつの名物を神のしるし

恋の寄水中にて

正三位為實

かきてなみとをたのめは宇治川ちかへる浪はまつをこそまて

中臣祐世

たれかいひけむ清水のあきもおもひのなのこそ世にはゝ

平時見

いつまでと流はやしとおもへも君かあはれも中川の水

津守国助女

こゑもおなしひのうち川もわたらぬ枕をしのへりもかなしくもあはれ

宝治百首寄水恋

前大納言為氏

ゆくすゑにほへもみつもはながれつまなき中の恋のうき

題しらず

永覚法親王

花染のいもせのこころそわすれやまてこそきえかへるかひは誰か

曽祢好忠

さ夏はゝこゝの宮深く鳴なるほとゝきすおなし声にやきく人

中務卿宗尊親王

何鹿鳴夜のかのこたえる嵐にそいはまのえそ寒し

猶そまかく亀山より吹嵐にたえんとはひまもなき物をそ見よとて

弘安百首哥奉りける時

何とし亀山さとりの鏡に世をかけて猶とのまそ聞く

入道前太政大臣

建保五年四月庚申に冬恋といふことを

侍りける

後久我太政大臣

かくても世をやほとゝきん嵐吹なり秋そのそまとも

亀の尾ときゆる世をも嵐

亀山院御製

嵐山風ても恋しと思ひ出あるれ心をやらん

國明親王

あらしにかゝりしは吉野ここ嵐山ともたにそ見んをしかれ

源兼康朝臣

何夜やかよふ亀も世をこそゆかし川中の人見れあり

前大僧正道玄

いそのかみ古き都の橋うつた見にし絶えて恋ひわたるらん

院御製

うき中はかけとの契りもたえまれをたのむの橋はよしやこゝろみ

家に五十首哥よませ給し時寄道恋

二品法親王覚助

いかにせんうきかなしさの涙川あふせもしらてしつみはてなん

題しらす

万秋門院少将

さりともとたのむこゝろの川の瀬をやみつもさへあさしとや思ふ

中臣祐春

物思ふ涙の川のみなかみはつゝみかねにし袖にみえけり

津守国平

まつ涙なりやうき身の川とこそいてし山の井やかれはてぬと

大江広茂

いかにせん忍ふる中の名立川あふせは今はなきてかなしみ

平行氏

おもひねの関とゆくしさへつまとしまつの袖の涙なるらん

紀俊文

わかれてはゆくへき袖もしほるへきあはれやなこと月にとてや

中臣祐親

あはれとかへるさへはさらぬつらさにてねにしのふそ袖の涙なりける

従三位経平

あひ初の夢のわかれはひたすらにねはうけくもの枕ならん

前大納言為氏

おもふとは夢のうきそて夜を頼むも夢をなく深

前参議雅有

手まくらも夢やかよふとつまてなき人を今宵もあひ見つるかな

鴨祐治

涙しそて恨はそてはさらに秋の人そ人を夢に見えし名

高階成棄

音ねの秋の見え無しかけは夢を見てしは忘れ

中原時実

さらにも秋やなかなか思ふ夢をもうつゝの夢となり

ましへしは

はるかなくもたれと思ふかひ初のつゆの夢の夢路つかふ

もとの夢をいかに人をまた後の関そうつゝのへとなりなき

正暦四年五月帯刀陣前合　恋

おもひの夢にふりそて夢うつゝかはぬさまし

影しらは　是則

秋の夜をまちわひてのとかの夢は夢ちとなまは涙はさらなり

寛治五年従二位親子乃家前合　恋

権大納言公実

辰をかへ〇まつりてこそ行しつま琴とりて染めて夜逢

夜逢恋を　院御製

逢見てもひさしき風のうちにそへてまきき恋いふそはきき

嘉元百首哥奉りし時　逢恋

前大納言有房

うらみ侘つらき恋ゆへの命をかけてながらへて

百首哥奉りし時

法印定為

今はたゝさらぬ別に先立て命のかきりまつへき我身を

恋の哥の中に

後深草院弁内侍

あはれその命をかへて逢事はすくなきたへていはむやうし

贈従三位為子

さしもその命しらすとも思ひきや来しともなくしみみは

法印房観

あはれにたのみてしも命をいはゝつらき人のひやかなん

平宣時朝臣

たのまれぬ命しらす年へて人のひとつひとつ物思ひをかりとも

中務卿恒明親王家桜家

行末のなきうきやめならへてまつへき我命なれは

後二条院位にかはりし時へとし思ひやれ

百首哥の中に行末を契恋とて

贈従三位為子

命あらはそれきこえん行末をかへし庭さしぬ菊の色かはり

題しらす　前大納言為重

菊の花手折てし我年月に結ひし波のいろそ見えせぬや

今上みこの家にて御時五首歌合に　菊薫

従三位為理

村のりと悲しき花のいろをかへさんとなりにしこそせぬ

今上御製

菊の花菊のしもにかへるまて命下そまつ

續千載和歌集巻第十二

戀哥二

題しらす　順徳院御製

頼めこし世をりことにて世々契りてこそみえぬ夕暮の空

亀山院御製

さりともと我たのまるゝ夕暮を契りし中はいまそしらるゝ

嘉元二年廿首哥奉りし時恋　前大納言為世

なかなかに人のこゝろのかはるをもたのまれぬとき思ひしられん

恋の哥の中に　太政大臣

頼むともやその言の葉のすゑはまたいつはりならぬ世のならひかな

百首哥奉りし時　入道前太政大臣

人のうきもすゝかはらぬ頼みてもたのむもやまぬ世のならひかな

題しらす　前大納言師重

契おきしそのいつはりもこゝろのまゝにたのむとなりのなれ

權大僧都経信

なからへてそれかたみのうきをかね頼むと思ひさためさらまし

治部卿深

偽とおもひなからもしらぬかほにたのむはかなき命なりけり

平貞時朝臣

なきつるも秋の風なれと聞とかなひそゑなかし心あらなく

平信時朝臣

絶えよえらむやあはれと秋風の音にそよくゆふくれの野

権律師円世

吹なひく風のまにまに女郎花いつかたへかはなひく萩の葉風

弘安百首歌奉りける時

入道前太政大臣

色にそていかてつらさのしらるらん風のまにまに咲くは萩

前大納言為世

たのめこしたのめしよりも夕暮の風まつよひのおもひ絶えぬ

前大納言為世よませ侍りし春日社三十首歌中に

法印宗円

さそやはくもりし雲の上にのみはれてし人の心をそみる秋の夜

右大弁隆長

たのめてもとはぬ人まつ夕暮は思ひもたえぬ入相の鐘

前大納言経長女

聞ことをいひもそはてゝまちまつをたのめし風の夕暮の空

法眼源承

つらさのほとをしなくてはこゝろせめやこよひの夕くれの空のうき雲

嘉元百首歌たてまつりし時待恋

いそのかみふるきみやこをきてみれは秋のよすから月もさやけし

津守国冬

永仁二年八月十五夜十首歌講せられし時

月前契恋といふことを

為道朝臣

いつまてか月のみやこの人たのめ大空とふりし夜をもおもひ出は

永仁元年八月十五夜亀山院にて十首歌めされし時

まゐりし時歎恋

津守国助

ゆくへの雲ともきみすみなんなかてあふれけれ夜寒月のひかりさへ

影しらん

宰相典侍

おもふやたれのなかにものひかりまつのこにたつかは月の夜くと

大江政国女

今ことに秋のしらぬ雲をかりこよひしきやかれのかの月

三善春衡朝臣

絶まよりとたえ浪かよふ秋かなしかりて行く月とも

前中納言資名

これつはかりの夜とひかりもゆかしこよひなるてまた秋そしらん

後二条院御時歌めしける時人々によませられし

十首歌の中に十五夜寄恋といふことを

贈従三位為子

をのへにもかねもおとつれてあけかたの月のいろにそしらまし

冷泉中将

しりぬらんたちはなれてもおもかけの月のなかにそすみける世そ

前大宰大弐俊兼

ほのとひかりかゝえてありあけの月のこゝろはいさよひの月

沙原景綱

御かけなるあきのなかはも月をそあけゆく

平宣時朝臣

あらき風にもいさよふ月影をこゝろよりさきあけてゆかなむ

前大僧正實超

前大僧正仁澄

月のまへそ契し秋とおもひしにひさしくみえぬたのみして

後二条院御製

たのむかな契りし月とおもひてもうきにつけてはかこちかほなる

伏見院御製

世をふかくたのむたのむも夜半の月ありあけの風にすみのほるさと

今上御製

君か代をいくよいはひて秋の霜とともにくもらぬ月をみるらむ

嘉元百首哥たてまつりし時

前大納言為世

かくてこそいまそかはらぬ月影をいく秋まてもなかめきつらむ

題しらず　　修理大夫隆康

志らはゝたえまとこそ契しか衣つましても風も身にしみけり
歎きをわかくへのこせりけれ

中納言家持

あふことをこよひとたのめしはまして春の夜ばかりなかきよし
なりけるへと侍らぬ

右近大将道綱母

あかせるやつらきねしのふこえ(?)いかにせんこれ(?)侍らん

題しらず　　中務

なかめて待しよはまさりてねさめてやなかき夜のかなしさ
らん

百首哥奉りし時　　入道前太政大臣

こひそてゝきのふもけふも大空をのみなかめつゝそふる
秋田もる志のゝいほりのかりのいほにいなかぜふくそおもひ寒き

題しらず　　紀淑氏朝臣

こひ我世をはゆふくれの露をかこつ袖のうへかな

宝治百首哥奉りし時寄風恋　　土御門院小宰相

思ひさえ涙にしめる袖しらすかせをまつとそ人はしらなん
恋の哥とてよませ給ひける

後二条院御製

かきりあれは今そかへさむ世の絶し後もかはらし月は宮こて
昭訓門院権大納言
わかれてし契りもあらは行かへて余所にも人と思ひけるかな
藤原泰宗
きえぬへき露の命を花にのみ世のはかなさを見るにつけても
あはれなり
思ひやれはや一夜の別にも かへらぬ夢の契りなりけり
思ひ出る友とも成ん時鳥
為道朝臣
二ともひとつ人の世をいつしかなきにまかせつゝ後の世を頼む

嘉元百首哥たてまつりし時無常
入道前太政大臣
秋の夜の後には比見ん世々をへて昔の月は雲かくれにし
稲舎を思
前大納言為世
なからへて命もあらはいつまてかあるかひもなき身をはしるらん
弘長二年亀山殿十首哥に述懐
光俊朝臣
はかなくも思ひけるかなよしやたゝいにしへ人も夢の世の中
述懐哥中に
大江頼重
いにしへもかくこそ有けれ人の世はうつり行なる秋のことのは

法印良兼

かりそめにたひつるりの雲晴てまたみつまての影のかたかな

前大僧正實超

人はまたさしむかひたるおもひかはしらしなよそのうき身にかゝりつゝ

権大納言兼季

世のうきにたゝひとつの身をまつの（ママ）我のなかれにひとりにかゝるかな

源光忠朝臣

あはれしれたえぬをりのつきこそ（ママ）むかしのあとの月のかけなれ

左京大夫実任

こよひなき花もしらぬ月のあはれとしてこそ後といはまし

三善康衡朝臣

なくさむかたこそなけれ兼言もなしや今かれゆくさかりのかねに

光俊朝臣

きえのこるいはまの星よりも東のそらのあはれなりけれ

花をさそひて詩哥を合られけりし紀伊守を

源具行朝臣

鳥の跡のこれはしかのせみてたえしやむかしをまねひつゝ

題しらす

従三位親子

おもへはあさきこゝろもしれぬをすてゝわかみのゆく末のしらく

民部卿実教

さても猶別といふらん人の心よりすゝむる鳥の音もなし
前大納言家持
うき人の心よくいそぐ別路をとめてやるせの袖のわかれ
法印玄恵
うかれよは見るとはつれなき人の別かなしき
二品法親王家五十首歌に別恋
前僧正道性
あひ見ての後の別のかなしさも我身のつらさ世に知る人
百首歌の時
少将内侍
何故にかなしき人の別路をとめても猶袖にかゝるらん

別恋を
今上御製
人はなほ契りし人のつらさとて後をたのまぬ別かな
徽義門院
行末のおもひ契りもやすくわすれなむかたみにつくりし
春宮権大夫有忠
あはれ身はさてもやと人の契をもとめしてみむとぞ別を
宗恵法師
忘れ人のこりし別路のかれのつらさかなしさの色
祝部成久
思ひしそ雅の契のさぞかしかたの別かなしき

藤原秀長

ほしもやらぬひそてまし夜ひとしひとく鳴に別かりせは

藤原基祐

後の世のなほかたみとて別ちのはてぬつらさならぬ人のうき

しるへしん

わかれちの後をといはゝ世を契りたのむへきこと人の心は

三善貞康

明ぬる夜しれやさこそはましよの中の別かなしさ

藤原家秀

うれしき後にはそれ人の待らし鳴つる恨の明の月

藤原家行

月たにも心あるとそしらるらん雲の神無月しもまた後まて

弘安百首奉りける時

大藏卿隆博

別ちの名残は世人かはいかにて世はまたこそ有明の月やうきこ

恋もしらん

前大納言為顕

わかれちはまたいかにわかれちのまたふたゝひ見んかなしきの月

廣義門院

あはれ明月さへしゐてやいはれなんうき空にかへりなん

法皇御製

きぬ〳〵の袖の涙とかこたんとてかけこしありあけの月

題をさくりて詩哥と合せられ侍し時別恋に

[illegible]

見なれこし面かけやかへりてしはしこそわかるゝ袖の涙の月

暁を恋といふことを

今上御製

思ひてゝ末もやそて別れの涙よりうつるありあけの月

嘉元百首哥めされてまいりし時暁別恋

前関白太政大臣

おきてゆくゆふへの月も名残には袖にうつしてわかれ行なり

百首哥奉し時　前関白左大臣　押小路

ちきりしをよは〳〵も雲ゐのわかれにはうきたつ雲の名残のそらは

正安元年六月五首哥合に逢別恋と云事を

後二条院御製

関守はあらきゝうらもいかならむあふ坂にかゝりてわかれぬる

百首哥奉し時　内大臣

公世をおもひそたえし関守のうらみかはらすあけのわかれを

恋哥の中に　前左兵衛督教定

心をやつくしの袖にかけつらんなみたわれてもあかつきの露

宝治百首哥中に寄衣恋

後嵯峨院御製

これ秋の朝の宮の露けさハわきわれつゝ波かゝりけり
女のりとよりそりてつゝしけるか

左近大将朝光

またのときにハされともかくさ兄とをかと郎共て神の家けさ

百首哥奉し時

入道前太政大臣

後ところ子をまつ海の朝けのみるしるの家
しられ

賀茂久世

このてかわもこの華の一えらにこゝろをとめハつまれ
女のりとにめくく朝まつかうしかな

参議定経

おきつわれ海のなかれにかゝる身さへやそて家けりん
也し　　よみ人志られ
思ふやまちかくころ舟をしそれまこさむかくこれと郎の名を

後鳥羽院

鳥の音もくれはわれつきたへての波かくれとも郎の家に

抵義門院

永福門院

別てもまくらのうき鳥の枝をたとりえきの庵よとくし

百首哥奉し時

二品法親王覚助

とりよそてそのきちくたち別鳥の声をきゝれちのみち

羇旅を　　　　大蔵卿隆博

思ひやるかたこそなけれ故郷に残しゝ人の身のほとを(?)

人も物思ふ後そつらかる(?)

　　　　　　　　　　祭主輔親

けふまてもうき身ひとつにたへしかと世をいとひてはすみうかりけん(?)

　題しらす　　　　　　素性法師

はやくより立かへりきて波の花(?)神のみかたにたえまなく(?)

　家に百首哥よませ侍りける時旅を

　　　　　　　　光明峯寺入道前摂政

忘れすよ(?)ふるさとの[?]やみしか夜の夢路に(?)さそへ秋の空かな(?)

無常の中に　　　　前大納言俊光女

いつまての命なれはかしらの(?)はかなき世に(?)心をそへて経るらん(?)

　右大臣家百首哥よませ侍りける時

　　　　　　　　皇太后宮大夫俊成

思ひしれうき世の中のはかなさをたゝ夢(?)とのみなりもこそすれ(?)

たのみきしむかしの人はいかにして(?)まさ(?)へてけるかなしき(?)

　　　　　　　　　和泉式部

夢(?)の世におもひしるとも(?)世の中のうきにまかせて(?)

　述懐の心を　　　　源兼氏朝臣

ありし世もさまてはたのしみし(?)我身(?)をすてゝおもふに(?)

弘安七年九月九日三首哥講せられける時寄菊
恋といふ事を　後近衛関白前右大臣
心あらん人の心もしらすまてのかとやさてなからん
前大納言為世
たのまれぬ行末もひとへさ白菊の露まつほとのはかなさは
題しらす
津守国道
見れはまつうつる心の九月菊の花さかりそのたのまん
法印長舜
あさゆふにうつる契のつらきかな人の心の花をたのまし
権中納言公雄

花ゆへにうつろふ色も猶あにまれなとさそはれし恋の涙そかなしき
弘安百首哥奉りしとき
前参議能清
かくていつはりならぬことの葉を人の契をまたやいたのまん
人の涙のうへに書つけし哉
藤原宗秀
なけきとそ思ふたよりをすゝ涙まことに人よこゝろに猶
題しらす
藤原利行
ひくわさは何をこそありもあつさらりとの色のかへすよも哉
藤原宗泰

かれとはなさりしとみえしまことにかねて思ひしはなれぬにぞなき

業平朝臣伊勢へまかりける時斎宮なりける

なる女房のもとより

よみ人しらず

ちはやぶる神のいかきも越ぬべし大宮人の見まくほしさに

業平朝臣

恋しくはきても見よかしちはやぶる神のいさむる道ならなくに

月見るとありしよりとも世のひとをこそかりきれん

中納言兼輔

さにも見かへしみえねはいつ人の月みてはれ思ひしるらん

議恋をよませ給ひける

土御門院御製

わすれてもいつあり明をおもふらんかへりて出しかたの月

百首歌奉りし時

左官

月見しもこの人さへ物と思ひしをなとてこゝろに残る袖みん

正和二年九月尽日十首歌よまれけるに

希待恋

今上御製

今さらに思ひしらるもたのまねはまつはいつしか夕暮の空

恋の心をよませ給ひける

後鳥羽院御製

さも移せたる影ハうけぬよりの影おほくもありつる神となりぬや

百首哥よみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

今は我身のちの世の宿の庵のそのよもなほあれやはせむ

二度来ぬと云ことをよめる

中臣祐春

まよひ百歳すきぬるをなほ身にまさりきておもひとおもひすてまし後の時

題しらず

藤原行綱

きえてのちのうらなきき鳥の跡をと二度来ぬ宿にすまひやせむ

法印園勇

いかにせんと涙のあはれ身をくだき二度たのみし袖の月かけ

丹波忠守朝臣

君まちし袖の涙ハ晴もせでまつ夜もつきぬ月の影かな

道義法師

物おもふ袖ハそてのみならす月さへ人の袖にやとりてぬれて

前参議基有

かはらぬ袖にこれ夜の月ハ波のかけに見えぬとも

百首哥奉りし時

權中納言爲藤

雨露そふつゆのかかりまし袖をなほ身にしみても

春宮大夫で年後坊上といへる侍

同

権中納言親房

いくとせかひとへに恋のつれなさはたえぬ袖のうへにそ

宝治元年十首歌合に遇不逢恋

前大納言為氏

おもひよる残ゝるつゝいかひとききにうきさへやまさて わか世

たのし紀ゝ

前大納言為世

なさとさこさむくの後にひとれはまとひなりぬ恋の涙かな

旅恋を

前参議基任

別ていくとせやとらん夏の人の心をいかにうらむる

嘉元百首歌に時逢不逢恋

從三位為信

人心つらきにかはるひきよてにゆくさき長き年の関守

権中納言公雄

人こそ今はかはりし有しよの夜をもおもひかゆる夜

前摂政左大臣

涙かはそのかりはまさるぞ風まさるかなしかりける思ひし

住吉社にて詠侍りける百首歌の中に

前大納言忠良

忍ふもうしねさて別し有明の月にかはりてのこる月影

長月の末の明ほののことのはかりんも同

和泉式部

余所にてもおなし心にありあけの月ハみるやと
たれにとはまし

續千載和歌集巻第十一

戀哥一

題しらす　　坂上是則

秋山に朝ゐる雲の峯こえてはなれもはてぬ恋もするかな

物ゆへに今又かよふ人ありと思ひてつゝむ哉

九条右大臣

秋萩の末こそかゝれ人しれぬ廉のしたにはしのふもやすき

建仁元年五十首哥たてまつりし時

前中納言定家

かりにこそとひこし里の秋風の身にしみてうらみしものを

恋哥の中に　　後深草院弁内侍

袖の上にをとをとつゝ露おける袖も秋とかはる神無月

前大納言為氏

はかなくもいひ出し秋の田のかりにしのへてとはぬ君かな

千五百番哥合に　　二条院讃岐

思ふことなき身の何につけてか人のあらぬ物は思ひし

逢ふことのまさにもなくて

光明寺入道前摂政左大臣

たのめおきしことの人の言葉もわすれてもなほまつ秋の夕暮

洞院摂政家百首哥にしのふるこゝろを

皇太后宮大夫俊成女

望みつる契りもなくしてかへるさの道の露のおきところなき

家に千首哥よみ侍りし時寄恋

二品法親王覚助

見しままにそのおもかけのうつらなく涙の色のかはる人

題しらす

前中納言公備

色うすき浅茅か原の夕暮に秋の露にはおく人そなき

九条左大臣

露とこそこほれておくのはらふ人もあれはしるき風のまきれに

皇后宮門侍

かへるらんやみの心有けの松の嵐しと

永元百首哥たてまつりし時忍恋

前大僧正道玄

消かへりつれなきものとなりぬるを人にしのふの袖の白露

題しらす

権僧正慈仙

なかめつつ待よとなりて恋しさの我身もしらぬ夕くれの月をいはは

大江広房

ことのみか同し秋の時雨にもそてのみいかにぬれまさりけれ

源親教朝臣

時雨そふ風の色みえて神なひの森のこすゑもうつりゆくらん

左衛門督公敏

うつりゆく人の心の秋のことはしもかれぬるの葉そなき

正安三年九月盡日伏見殿にて御幸ありて

人々題をさくりて五十首歌よみ侍りし時秋述懐

右大臣

身の秋そかれ行方なれともの心あるも人よりさきに身をしるものは

題しらす

讀人しらす

露わりぬ我は情をしるましを迷ひの中の道のあはれを

新院侍従よりつかはしける

朝なあさなおきてかくるかねの声長きかこつ袖のなみたをかはきもやらぬ

返し

新院侍従

ほかにさへあはれをしれはかなしきに袖のなかれをたとへてかけるも

恋の歌の中より

藤原雅朝朝臣

立かへり我袖をかくとかへらぬそのかみの無常はる

右兵衛督教定

何ことも今はかさねて涙川袖をかさねつゝ袖をかとそや

平時元

たちかへりかのあまのかるもかくすなみの下のうきに忍ぶ

前権僧正雲雅

命あらはうらのみるめもかつきてもよしやつれなきもかへらん

正三位経朝

あすよりは今は頼まん中々に逢さりし夢の契哉

従三位宣子

いかゝせんうき中川の水と涙とせきし絶ぬる袂成哉

観意法師

かれぬへくは契りし末のいふかれはたえて流るゝ中川の水

唯教法師

あひ見てはいへのかひの逢瀬にもまた袖ぬらす中川の名

大江貞重

たえぬるはよその恨そやらぬかなと中川せきせし人の心なるらん

前権僧正定顕

夜床の思ひに浮の里の水出て見し影はこほれる川

平重時朝臣

我ひとり月やとりけん波の上にうつりて今は中の瀬

参議雅経

わすれ草も思ひのきえぬ岩間の蓬の杜の氷のとけし梶を之

平家宣朝臣

忘草かはる人は我か猶我身にしらてよをへたつらん

丹波経長朝臣

いかにしてしのひ絶なん中川のゆくへのかひも我身にそ知

嘉元百首歌奉りし時恋

前関白太政大臣

かくて世にあらんかきりはわすれしよおもひのこさぬ契しらん

源家氏

思ひわひぬ袖にはうきをうらみても何のはてそと思ひけるかな

百首歌奉りし時

前参議雅孝

たのみつるまことやいつはりとしもしるしはなくてたのみかねつる

恋歌の中に

前大納言為顕

年をへてまちこしかひもなくてたゝひとりねの床のまくらかな

思ひわひ恋路はいかにとふ人もなし

太宰権帥為経

世に袖の人にしられてなけゝともかひなき身をはいかにせん

女三品治部卿

恋わたるなみたの末はいかにしてうきにきえなん身をかなしまん

津守国助

嘉元百首歌奉りし時寄風恋

花山院内大臣

たのめこし契もいまはかれはてゝ身にしむ秋の秋風そふく

題しらず

深き江(?)もさしも掘出て心から思ひしつゝ涸れてしまふ　前参議實俊

あさからぬ人の心のかよひぢはやまとことばに契りそめけり　権中納言實前

人ぞ知るさとのまへも世の人の心ばかりぞつれなかりける　中納言定頼

池水の汲ひとしあればや見る人の心はいつもかはらん

題不知　源邦長朝臣

山の井のあさきながらもたのもしいかにすみてかげのみゆらん　為道朝臣

手にむすぶ人もなきにや絶えなんかひある清水の影の絶えなく　安嘉門院甲斐

むかしたれ人の契りし跡ならん人の野中の水はむすびたえせぬ

二品法親王家の五十首歌に従ふ　前大納言為世

掘井あさくてたのみし物をこゝろの世に知りてゆく水はなほ

卅首歌奉し時　権中納言為藤

河舟のみかさそのかりの浦にて縄たえし後は身はうかれて

嘉元百首歌奉りし時寄橋恋　冷泉太政大臣

かつらきやくめの岩橋中たえてかよふ人のあとそたえにき
源兼氏朝臣
恋哥中に
恋わたるこゝろのうちやなきさなん恋路の橋のよそのちきりは
式部卿久明親王
あさとはをたえしの橋のたえまくにかよふ恋路のあとそ絶ぬる
権大納言冬教
ねよをよそに後のよのなかくさりしよの道
禅信法師
なかしにはあはて中々いかならんつきたえせぬそおもひありけれ
源義行
かくはかり世をはたのまむ行末のたれゆへつらきおもひなりけん
永仁二年亀山院に五十首哥めされし時
津守国助
命こそあはてかなしき中のものとはいふなれ
前内大臣
なかなかにこの世のはてをまつこともいのちの
永福門院
おもふ世をたのむこゝろはみちのくのなかなかにうき
権大納言兼季
恋わふる後をたのまむはてもなしこの世はかりのいのちなりけり

赤染門妻失首斎に

前関白太政大臣

たしかりしちかひは世の命さへいひしかはりにかへるへくもなり

悲斎乃中小

平貞俊

せめてなほかくてそ家の年ふりて世をかけしとしをへぬれはかなしき

平宣時朝臣

今いくたひや金の光のときくて暁もわかれいかなかれ

前内大臣公

かへしけにいさひしあはれぬよるもよはなけてのみ夜はなをれり

寛治百首歌よみ侍りける時歌読忠

従二位行家

うきはよになれし日をなかれあまそうつつはかりけりのことをしも
聞しらん

二条院讃岐

今更にいつはりかとは新枕のことさへまたはかれぬる

右近大将道綱母

さしもかさなり行かくる道もさりとてまたはさそひ

平泰氏

今はとてやまおろし吹く風のおとにもにたる心地

津守棟国

なきかにのこさしよ代の末々まてもあかすおもはれの空

前東宮家

あきはさてはさの氣色もさかりそめ中も今はへ過ゆく

為道朝臣

二たひとも見しはかなさをおもひたらはよしかはらぬ月の夜は

後二條院御製

たゝそれ一夜こそ長き夜の陰とも月にのみ清き前らし

中宮

そのつゆもひかりに涼しき秋の月の光そへらんとて

乾元百首に寄不過遠

万秋門院

月やまし西のやまかこたれをたに月になそへてすゝしきて

儀正覚園

さりとも月はかゝる西にけをいつの雲の立へたてん

弘安百首哥よみける時

前大納言為氏

西の空のひかれぬまつり形見にて須よりかゝる山のはの月

恋の哥の中に

太宰卿隆博

身のうきにかゝらぬ長の西の空しきて恋しさ山のかの月

順徳院御製

暮ゝかきは物思ふ秋の夜のいかなる別とありけん

月も猶かゝる雲霧やいかならん晴ぬる空も秋の夜の月

信實朝臣

嶺高き嵐の雲の月影を雲はれて秋やかはらん

永仁年八月十五夜十首哥講せられし時

恋とよめるを

大藏卿隆博

月をこそなかめしかとも思ひ出る秋の夜ふかき心の名におふ君か代

為道朝臣

そのかみの名にしおふ秋の雲霧もはれてこそ見れ秋の夜の月

新院兵衛督

見し世の

夜ふかき月をそらにもなかめても人の忘れしかたも出しを

太政大臣

色かはる月の光のかけもなく秋の名にそ月そのひかり

参議公明

くまもなき月を何かはかりそかゝる月の秋の霧のかゝりて

前参議雅孝

そのかみも見るやいかならむ今宵の名にたてる秋の夜の月影

法眼行海

久かたの空に雲なき月をおもひつゝ月の夜をまちて秋の夜の月

義国法師

ゆくすゑの今も光を照す月の月せきそ夜ともなし

嘉元百首奉りし時恋

前中納言経継

人はよし思ひ出すともかはらぬ有明の月

広義門院

影しらぬ有明の月をそれとしもおもはねとまつ人のかけ恋

基俊

有明の月見るたひは出てし君かけしとさへさりけり

前京為継卿

かへりこてつまてまつ有明の月と恋しき我衣手

今出河院近衛

思ひ出る有明の月はかきくれて中々恋しき深き

藤原泰宗

まちかねし夜半の月ゆゑ面影の有明の空にいとゝ恋しき

平貞時

見しまゝの人は雲かくれゆく月に形見の中に残る面影

従三位親子

うき人はかはらぬ月の神代より月をみるとても恋しき

弘長百首奉りし時寄月恋

前大納言良教

思ひ出る人の月にたえてもなきに袖のしめる夜は

恋の歌中に　津守国助

いま更に来ぬ夜の月のなかめつゝしのひし比のたえてひさしき

従二位行家

ひとり(?)日数をへて月影をまつことさらや人のうらみん

そなたにはあひ見し後のいかさまにうきをしも我も思ひそ

弘安百首歌奉りし時

前大僧正隆弁

いつまての神のしるしをいのりてか世のためとてはちをまつらん

題しらす　平貞資

思ひしる(?)事のはかりも後の世のために見えぬやそのつらさなから

中臣祐春

おもひたりいさゝかそれにことなりて世をいとふ身は我のみかはや

平行氏

あはれしれさらはうき世のいかならむ後の世かけてつれなかりける

嘉元百首歌奉りし時過ぎ

中納言為相

なかそらにあふ事かたき人の心を今はうきよにたのむへきかは

恋歌の中に

今出川院近衛

忍ひ(?)てもあはて過ぬる夜のかすそいくよあらぬ鳥の声

中宮

いはれぬる身にしよもの憂をうつして思ひ合せるかなしかりけん

百首歌奉りし時　太政大臣

我のみそ思ひ合せらるあはれまことに三代の昔の跡は

題しらす　前参議家親

今はたゝ身をそへてうき世の中にはれぬ思ひしらてなけかん

弘安百首歌たてまつりけるなかに　亀山院御製

なを世中にいつとてもなけく身のうきよ人の面影
恋すとてなかなか御はりなる　正三位為實

身のうきはおほふとやかくてありける身はれにそ世にかはりなき

祝部成良

さのみやはやその夜の面影はいつの夢の契りなるらん

源重之女

あひみしは身をすてゝ流れきけれて人まかくらまかりさらは

平貞文家歌合によみ侍りける　貫之

あかすしてわかるゝ人を思ふとてなにゝよそへてわか袖の海に

題しらす　友則

立かへり思ひ出られこきいそのかみ舟なき跡のうきなかりけり

葉室関白

年ミせし秋てふ月の名におふと今宵の空をながめつるかな

家平関白

ことし月はなにはのなきの身まてぞこひしきこともかなしかりけり

後深草院少将内侍

思ふまゝに嘆きてすぐる年月はいかなる中をへてかなりけん

藤原為明朝臣

そりうきて経たるかたしは年月をそむく心のつらさなりけり

後光厳院御製

一夜だに経まじく思ひし身のうきに年月のつもりなりけり

恋の命とてもなき世はたのまれず

亀山院御製

年月のめぐりてつきぬかぞへてもまれなる神のみぞ流

続千載和歌集巻第十五

恋歌五

とひ見えて久しくなりにける女につかはしける

平兼盛

ゆくへのみ見えし君かな山の風に風まつ雲のさためなき世に

いかなりける時にかありける女のもとにいひつかはし
ける

権中納言敦忠

うきよ風吹きさためなきれは夏山の風にさそはれ行水の泡とそ身なりけり
影しらは

前中納言定家

わすれなましいかさかましいかなれとこそ思ひつゝ秋風

信実朝臣

まちわひしひの夕暮我身をとふとうらみてもなき
知らぬ女ことに人をまちかねしゆふくれ

兵部卿元良親王

よしさらはつまも山の今はとてこゆるなみたに袖そぬれける

光俊朝臣すゝめける百首歌に

前大納言為氏

思ひわひしかれ木の葉たつさはに涙ハこほれつゝ

弘安百首歌たてまつりける時

忘られて山のつれなくもまつとききし人わすれぬ
物かは

嘉元百首哥奉りし時念不生悪

法印定為

二道をおもひとゝめて出る道のつきぬ後世のためのしるへ哉

永仁二年八月十五夜十首哥講せられし時

月前懐旧といふことを

権中納言公雄

見し人もなくなりにし月見しもこれにかはらぬ影そ恋しき

懐の哥中に

平時敦

今ははや涙き我身といひし人の袖とゝもにみし月の影かな

平貞時朝臣

情しらむ人に見せはや君かためなれてすみぬる袖の月影

永仁六年九月十三夜式部卿親王家三首

哥に月前懐旧

平宗時

わかれにし人をしのふとふけすれはなにゝなかるゝ袖の月影

題しらす

藤原宗綱

隠家をてらさはてらせ世の中のうき身もいかゝはれぬ月

後照内大臣

いく世まて今夜の後の月を見む老ぬる身には後もたのまし

嘉元百首哥奉りし時

従二位為實

ちるきては浪よりたかく雲ゐよりかゝる峰のはなもちりつゝ

百首哥よませられし次に

法皇御製

うかべてもかひこそなけれよし女いさり海士の…

恨恋の心をよませ給ひける

院御製

名にしおはゞまてもみんながらに浦…袖…

土御門院御製

恨わびし袖にのみ…海士の住…

従二位家隆

あはれとも人のおもはぬ住里の…

題しらず　平時元

いかにせん…無常…恨…

しらぬ…恨わびおもふ…

修律師因世

昔恋しき人…恨…

菅原重經

正三位為實

見えといひても…

寛治百首哥よませ給ける時　寄雲恋

花山院内大臣
根もひとつやまの枝のかはにさきてわかるゝかなと
題しらす　興風
花とひく身をうらつ桜とさりなきいつしかまたも今はきこえ
百首歌よまれし時
法皇御製
はかなしな恋しかりける何にはのかなしき世に我のみ見つかな
恋の歌の中に　従三位光成
うつみちるより後ある思ひの秋の身をすてていつやらん
法眼行済
しのひかくこそ来つるかな身をうらみたる杜の木陰
源親教朝臣
かきくらしふる雨の絶えまもなくのこれるかたみのなみだなるらん
前大納言為世
うらみてもたゞ恨のみ葛原風を待つ身のあはれなるかな
弘安百首歌たてまつりし時
入道前太政大臣
うら風きてこゝろのはてはせめて葛原のうらみもかなし秋風そ吹
題しらす
安嘉門院大弐
秋風にうら見をかへし涙葛原露のうへなる人そ恋しき

同院摂政家百首歌に

前大納言為家

塩風のよし里のあしやのなミちひとめくるやいそふ風吹

久安百首歌に

皇太后宮大夫俊成

里はあれて浦にうつりし住吉のきしによせてこそ神はまもれれ

恋の歌の中に

典侍親子朝臣

いかにせん力をすまの浦風草の名にたちてやまぬ人のなき

藤原国氏之

恋人の絶え稀の里はれ草の世の中に成りそふらん

賀茂経久

うき中は絶えてやミと思ふものを涙の露かゝるらん

平時邦

ほしきの形見とての秋風にふきてまさる家そこひしき

円蓮法師

うらみても人のこゝろのほとみれは水にとなからぬ袖のぬれなん

平貞忠

袖のしいさて山井の影水よそにすれ後のかなしさ

大江政国女

はとつりとそよすけてかゝりまての里に思ひて身のつきぬる

藤原経定朝臣

今さらに口をし御かそかてよりて菊をとりしつゝさくらんも

権大納言實衡

世をいとふ聖のいくよ思ひ後の中となれて

藤原懐世朝臣

かくてのみ音に後はたえてさ大志つゝいとて惜さらしかな

うらみてはなきひとをなれとゝりと花のしのへさむかなれは

うらみへしらん

今上御製

思ひ出てもかくこそすれていかにして大口思ひすなといそ忍ひし

うらみへ志らん

一すちに思ひなれしそいつしせん兎しゝやすらひもせん

今上見んこの文とも仙洞時五首歌合に述懐

権中納言為藤

よしさらは思ひ出て中々にうき世をいかになるらん世

百首歌奉りし時　藤原為定朝臣

まよふ思のひとつも聖のまよひしもいかなれ

洞院摂政家百首に述懐

信實

かくてのみ聖のとおもふ心をしひの道のせまきてへはこし

述懐歌中に

入道前太政大臣

人はさてもうきにもやかて津の国の宮こにてもみえぬ月日そ

平宗宣朝臣よませ侍し住吉社三十六首

哥に遇不逢恋　法印定為

思ひわひいまさらに年月のなかれをたにもまつそかなしき

題しらす　永陽門院少将

忘れぬも世にはかひなき名のみして口すさみにも中川のさすらつらき

権大納言典侍

たのめこし契りはかりを思ひ出ていかにうらみて我身なるらん

嘉元百首哥たてまつりし時恋

前大納言為世

忍ひてもあはれと思ふ心にて思ふとたにも思ひしらなん

百首哥たてまつりし時　左大臣

思ひわひ身のうきことを思ふにもつらさは人の心なりけり

題しらす　二品法親王覚助

忘れんと思ふ物から思ふこそつらさの心かはりけれ

新院御製

侘ぬれはなれぬる中のいつとてか人をうらみてつきせし

藤原経宣朝臣

つらきをも思ひしらすは我身こそ世をうらみても思ひしるらめ

藤原秀行

たてはまし我身に海のうらみならすしへのつらさにたちまさる

鴨祐敦

ちるまてもすまてや秋の雨露をうけてそ見る人あはれなるかな
ましくへなりぬ

見るたひにうきみかはらねとおもひしへとかへしとあすかりも

菅原在俊

うきみにもなれてきしたにけふはるへとかくもあはれなる

前参議雅言

見れはよそへつくもこそつらき身のうへのなかにしもしかるらん

嘉元内裏百首歌に

前関白太政大臣

恵みをかけしことのかれこそ見るをしつらきなかに見れやはかなき

百首歌奉りし時

たちかへる人のつきをとふらむ世をいとふきかひなさを思ふ心なき

後九条内大臣家卅首歌に

前大納言為家

うらむるもうきみのかはらねはてたのしみをせしてなにすみけん
覚えしなれ

権中納言師賢

恨僕のあはれたのみもおもふせめてつらさに後の世の神の渡をよかん人へ思ふ度

なれしよその人にかたるや思ふことはいはてもしらし
平貞直
つれなき後の人に思はれてのつきとをしのふなき
恨恋を
鴨秋夏
今こそはうきにつらさの我かみの恨もよそにみつる哉
従三位為理
ありて世にのこる恨もなからへてしのふあまりの命なりけり
嘉元百首哥たてまつりし時おなしこゝろを
前大納言忠房
命たにつきさらは又や人のあはれとも世にはつらさのかゝらさらまし

恋哥中に
前摂政左大臣
数ならぬ身はなかなかに思ひ知る人をとかめぬうらみなりけん
藤原冬隆朝臣
終にしもつらさをとひなんて人のつらさをとゝめかねつゝ
正三位惟継
なれし夜はいまて心のまゝにこそ思ひしられぬ恨なりけれ
平宣時朝臣
なれし夜はなかりしかは我ための人のつらさに恨みかねてん
源兼秀
いかさまにかはらぬと思はせてやへの人のつらさもうらみかねてし

神無月の比小白川にて雨ふりて人々十首許
読侍りしに恨後絶恋

権中納言為家

うらみこしむかしもしらぬ葉もまくらは中々に契

建治三年九月十三夜五首許に絶恋

山本入道前太政大臣

よそにて恨し程は風のなかにといふそうらみを数ふる

百首歌よみ侍りけるに恋

皇太后宮大夫俊成

うきせんにし人へと恨みんまそてしてさは海さうらへの人

題しらず

和泉式部

恨へきかたにもなく夏の物といひて涙のかたみなるらん

家の十首歌合に待恋のこゝろを

左京大夫顕輔

待かねん世のうき人をふかく恨てたえてもなくさむせん

續千載和歌集巻第十六

雜歌上

嶺松といふことを

圓光院入道前関白太政大臣

吉野山かはらぬは峯にのこる松は未たく年ふりにけり

嘉元百首歌たてまつりし時 深山松

法皇御製

なれてかも松の位にのほる身の我とおひをひの身を合て

前大納言為世

年もなほへかはらぬかくて身の老ともなる松とにほひ

弘長百首歌たてまつりし時 暁

前大納言為家

法に花の袂をかへし衣いの浅しと鳥もうきなる

百首歌奉りし時

正三位為實

いさこゝに峯の鳥はなれは名のみ流れてきかんおくまゆりかな

山中流水といふことを

法皇御製

思ひいるきさゝ山のほそ椎のもとにかれ渓の音のさやけさ

西園寺入道前太政大臣

布引の滝を見て

山おろしの風にたえしも松にふきいれてちひろにみたる布引の滝

題しらす

按察使資平

あしの舟はさやけかん難波ほりえのこの住居すみしも也
元正天皇難波宮ありしかまへし時

井手左大臣

難波江に昔をとへは大君の御舟こそむかしとそ見ゆ

題しらす

讀人不知

古の屋風そこの住吉ときこえし舟のあとに浪のよる雲そたつ

後二條院御製

難波なる人の浜のへの日に詠ものをとは問へる

宝治百首歌の時岸苔

太宰権帥為経

住吉の岸の根の松の色やかはらん

題しらす

よみ人しらす

網田はまの松の霜消て後まて

嘉元百首たてまつりし時

後宇多院御製

いにしへの民やまもれといふあとの代々の昔の跡は

前参議にて年久しく仰られ還任の沙汰と

しりん侍る

権中納言為藤

昔はよりかはらぬ鶯の音の…まつ

嘉元百首たてまつりし時鶯

圓光院入道前関白太政大臣

九重の雲井の花もよそに見しはるをかさねてみるはこの春
思ふ氏寺とてまうて侍りける

前大納言實季

わか世にもいく年をそへすみなれて今日まうつる春の宮
春の寺の中に

法務云紀

いく代経ぬ年ふる山路をかさねてもゆくすゑとほき春の宮

入道前太政大臣

春くれは三山のかすみ消てゆく老らくの年いつまてと

正三位實繼

山はかすみ色しるきまとゐせしあけほのの雲井の春の風雲の絶

山本入道前太政大臣女

川の瀬にうつれてなひく青柳の絲はみたれぬ風のまにまに

平時村朝臣

たか里にうつろふ梅の匂ひきて風のたよりに人さそふらん

念阿法師

世のうさを老木の梅はしらすして難波の雲の春やまつらむ

嘉元百首哥奉りし時　河梅

入道前太政大臣

色にほふ岸のみとりにかけみえてうつる流の梅か下枝

題しらす

土御門院御製

色をうつす梅のやとりもあかなくにしたひて金にほふ春の雲

従二位家隆

吹わたる月影のにほふ風に梅か香のこゝろさそふ夕暮の空

正應六年内大臣にて踏歌節會の内弁つとめて後春月といふ

ことをよみ侍りける

太政大臣

今はとて雲井をいてしこよひしも月の影こそかはらさりけれ

太政大臣家秀

春風にかすむ梨の花なほみえて月こそ雲の中にかすめる

前大僧正實超

おもひいる五十路の後の春にしもしのはしかはる月はみえけり

道洪法師

かすみゆく月のみちにもまよはぬは春の夜なかの雲のたえま

山里よりかへりのほりて侍るに遠家かもとへ申つかはしける

如寂法師

ふるさとのかすみもこゝに帰るとて雲の上にもなほかすむ月

法印覚寛

題しらす

帰るへき路のしるへも雲にゝてやよひの花のおもかけや見む

建保四年百首歌たてまつりける時

西園寺入道前太政大臣

春雨ハ空にみちてもみえさりき花ゆゑ恵ハ知りそめにけり

後二條院御製

春雨を

あさみとりかすみしけくもふるくの野への草葉も春雨そふる

約花といふ心をよませ給ひける

法皇御製

花ゆゑの契をたのみてこそ又あかぬ春の花やまつらん

寄花述懐といふことを

前大僧正禅助

花をみし春の数をはいさしらす六十の春をへにける哉

花見侍の中に

後光明峯寺前摂政左大臣

後の世のたか人植をきし花ハやもゝ世の春をへぬらん

権少僧都経信

むかしいかや春をへけくかそへみむ此山よりいつる春かすみ

開花といふ事を

平宗宣朝臣

逢坂の山の桜やさきぬらん雲にまかへる関の杉むら

遠尋花といふ心を

藤原隆氏朝臣

たつねきて又そらにしる花もなしたちかへるなる峯の白雲

前大納言為世賀茂社にて三首歌合しと

ところ花といふことを

法印長舜

をち方の峰にかゝれる雲の晴まより山桜かな見えもやすらん

題しらず

僧正道順

分入てこれより奥と思へはみ山の花そのこりなる

能誉法師

かすみ行色も見えすて山路のさそふ花よりもなを

大江家秀

立よりて見しもさくら花の香もにほふ峯の白雲

祝部行親

よそにはあかぬ花と見しかすむ梢の峯の白雲

源重泰

吉野山都の桜の色もまた花と見えしや峯の白雲

祝部行氏

都人見にこん山桜見るをたのしき家路をそゆく

中臣祐親

散らぬまに都の人桜花この雲の上ゆく人々にそ見えて

人しあらは見る桜の色の末にてもみてしる

山田法師

さくら花見ぬやまの桜花ちらぬ雲のかゝる峰

題しらす

まちこし今みる方に花はいつれと見えわかれねとよそにみし人　　赤染衛門

ありてよに風もをしまれやま桜ちらぬ世の実(?)をもおもひしる人　　津守国助

春ことの暮をのこし山桜のこる花のひかりもあり(?)けり　　源泰宗

桜さく山井の水のかけみれはしつ花の色を道　　藤原定成朝臣

堀川院かくれさせ給ひて後の春花を見てよみ侍る

次(?)に権中納言俊忠もとへ歌つかはしたりけるかへし

と中宮女房の中よりいひおこせて侍りけり　　京極入道前関白家肥後

桜花尋ねし山路に猶の声もはや人の心たえ人宿れ

ぬ

吉ゝ(?)の花の根に代々よりもへとふかく波にゆくえもまた　　権中納言俊忠

題しらす

花ちるとかけていはし鶯のひとつ声(?)をもよせる(?)ほとに(?)聞(?)れ　　中務卿具平親王

定なき世を宇治川のたえまにとりおくれたる桜　　万秋門院

花枝につけて民部卿資宣もとへつかはしける

今年もちりゆく花をおしむとて残る人こそ身となる世

光俊朝臣

むかしの命とてしらず

平行氏

みとしは老てたのまれぬ別によはいくとせもかはらさ花の郷

よみ人しらず

あれはその春とや風もさそふらん庭を雪とのみしく花さかりかな

平師親

吹かせ風さそいてせんなきは花のなきそ物うき

前大納言為世よませ侍し二首哥に落花を

法眼兼覧

花はみなちりはてゝ跡しなき梢の木の葉とにほふ白雲

弘安百首哥奉りし時

源為顕

菖蒲はかりにいはまの色こそあれは夏立ぬるにたよりかな

前信正道よませ侍し三首哥中に

首夏藤を

権中納言公雄

七十の夏にいされ俗の花なさけて老の後よりもなく

卯花を

伏見院御製

月とこそよりやこえん山越の卯花のさきにけり

夏の哥の中に

法眼慶融

世中をいとふ扉まは窓て身を卯花のかけにかくさん

右兵衛督基氏

ほとゝきすよかれぬ八幡杉のこゑはいつもきく哉

法皇御製

道ありてみゆる風をもわか衣草はのにと告けさに交てまし

後一條入道前関白左大臣

さゆりその花きぬれは霜となやせんおもふまさ庭の草の露

百首奉りし時

権大納言經継

ふるさとの花の陰の露かゝりにし夕日のかけのや御となそこ

賀茂遠定

まつさとを我にかたらん郭公ねさめしよはゝ人もこそ那

安陪忠顕

思ひねの夢のなこりの時鳥さめてもしはし待そときなや

藤原景綱

五月には名残て涼ん時鳥行へ風の母子その杜を

高階宗俊朝臣

ねられて風のこゝかよりて聞え来て苦しきも人もなし

覚空上人

さもつよて待つ物を時鳥なくしきさえて松のみねか

藤原頼氏

よひ〳〵の月まちいてゝ山風にほとゝきすなく郭公郷

平義政

時鳥つゐの月の山のはをいそく夜ふかき声にかくかかり

真浄上人

ひと声をまたゝつきせは時鳥まてこそ絶えとそきゝけり

藤原長経

きけはまた袖そ岩根の郭公たか里やとりて過る哉

古郷郭公といふ事を

藤原隆祐朝臣

古里と思ひてそ時鳥かれしなからの声はかはらし

題しらす

藤原時親

時鳥花橘にきこゆなりせし昔わすれぬよになく覧

五月雨日暮今宵そのせにやなりける

わしくふおや絶えて流るく

贈従二位為子

思ひきや昔をかけし時まち袖のうへはぬれしかなは

涙やし

万秋門院

里のこと昔をかけし袖のうへ今日はうらみそまさる

出家の後そのかみまいりける人のもとへ五月五日さうふの根をつかはすとて

入道前太政大臣

あやめ草ひかれてはうき墨染の袖にもかゝるねをかけ
ぬし　　よそ人もみよ

よそ人の袖にはかゝらてあやめ草おなしうきねをかけられ　ける

前大納言為世すゝめ侍りける春日社卅首歌
中に　　　　　　従下家図

柚の花しほるゝ五月雨にかくはふきしくとそひかましし

盧橘といふ事を　　平宗宣朝臣

ゆくすゑもそてやの母すてゝ日ゝ袖かへし折のゆかり花

祝部成賢

みしはうき花橘の袖の香に昔の里へしはしとまらん

弘長百首歌奉りける時五月雨

前大納言為家

五月雨の草のいほりのよるの袖しつくもおもくさそぬれまさる

題しらす　　　西音法師

かくてこそ世にふるみこそあはれなれ五月雨のはれまなき比

平貞宗

隠れなくひまなき袖やいかならんわすれぬ人のさもや恋しき

大江広房

五月雨の雲のたえまの山のはにまれにいてぬる月の氣なる

真昭法師

みな月のあさ浦こそ秋の浜風にほのかなる波のよるのあし

嘉元百首哥たてまつりし時

前大納言有房

あつさをし宮の光のひかりして影ある月もたかき夜のそら

題しらず

惟宗忠宣

風わたる川のながれも山かげは涼しくなりし秋の心

静仁法親王

夕まぐれ川やり水のせきとめてすゞしき浪のまゆふべ

水辺納涼

後二条院御製

涼しさはゆふ暮ならで山里の岩もる水の

せとのみえて後六月つごもりの日よみ侍りける

惟康親王家右衛門督

みそぎせしやそせにぬれしいのちこそあすの命をいかに祈らん

初秋の心を

権大僧都聖尊母

三島江の入江の風のひとよせとぞしるこそ知れ秋の初風

織女の前中女

平時茂母

星合のまちもよされてうきしのふの織女の心ぞしる

前大僧正良信

いかにして秋まちこしをたなばたのあまのかはとりたもとをぞ

紀家信

そなたとハ浪のよるとハかたらん霧のまよりも老の袂を

津守国夏

里ハなをしるしとみえし柴人の秋の夕霧

中務卿宗尊親王

何となく心にうつりし今いくとせの秋の夕くれ

伏見院御製

吹風のはきにおしてやかてまし久ハ雨かる秋のあはれを

後二条院御製

いつしかと物秋の色の吹しほる袖にたまらぬ霧のしつくは

前大僧正慈信

今とても年のかすにハ老の身と秋をもしらぬ霧のこころそ

前大僧正道玄

なかめつつ夜ふけてにほふ霧やさてのたえまにみえしかすかん

家に五十首歌よませ給けるに

入道二品親王性助

世をうき秋の草葉を霧の露ふかきそへてそあらはすらん

循明門院近衛

あふ村雨ふりて雨ふりにあはれて鴫の羽かきもつれなくて

りくへやつるつしくれ

常盤井入道前太政大臣
まけきゆ霧のはてにも見えぬかや老かきる宿の苔のよそふ
色し　よみ人しらず
霧こもる人の通ひ路白霧の霧の底にて神すむかなみ
正治百首哥たてまつりける時
式子内親王
わきもこかかとのさとのあさからぬ霧のまかきの袖
題しらず
太政大臣室
霧そこにたちのほる小山田のかりほの袖にかけてかひある
左大臣
いくよかれとも知らぬかせの風とおもはゝ霧のうちにたへぬきのうへ
兼空上人
秋さえにしらるれはとてや津の国の生田の杜に鹿の鳴らん
今出河院近衛
ひとの秋の哀いかはかりさひしかるらん鹿のねにそふさ山里のかな
文永二年七月詠人の哥合に風
よみ人しらず
まつ人のこぬよさひしき宿なれと秋の色のみふくらん風にいとゝ身にしむ
題しらず
大江政国女
葦火たく難波の宿にたつ煙月はまちつゝひとのなかれそ

藤原親範

日くるゝ峯のたかねに秋もなかはすきて出る月かけ

行胤法師

わしの峯にかゝる浮雲のはるゝよりさらにかはらぬ月かけ

月遅容と云事を

前僧正道性

ゆふこえの神もして月まつらん人のとかくに秋風に松まて

山家月

津守国平

年へたる松のとほそはいかならん大ひらやまの山風の月

秋歌中に

藤原秋景

雲はみなはらひし風の山のはにくまなくすめる里に月そさやけき

源親長朝臣

秋ふけていく夜もことに清見かた浦風さえて月のひかりすさまし

行観法師

長月の有明の神無月さして雲吹く風にひらの山

百首歌よみし時

入道前太政大臣

かはなみにさえとをりしもしら波のかけなる月に神人の袖

前大納言為氏

月のかたちをなかめてつまりて
さやけきにつゆもしられ

平親世

照りそふ月のひかりさへゆきかへりけりあまくもなきにしかし
もし　前大納言為氏
山のはの月いつれの世にかはるらんすみけるまゝに照りまさり行
影しられ　祝部成久
長き夜も神のみよにすめる物をこゝろの秋の月かけ
平行氏
君か代の神代の秋の月なれはいつもさやけきひかり成らん　行如法師
うれしさをそへいつれの波の上も見えけれはそ月をこそみめ
月前述懐を　前大納言為世
いく秋の波をこえてもみまし月の影のきよきを君の世にみよ
弘安百首歌たてまつりし時
二品法親王覚助
雲晴てのこるくまなき秋の月よをてらすこそひかりなりけれ
影しらぬ　藤原保能
君か代に光をそへてくもりなき山の端出る影のさやけさ　法印静伊
たのもしなかみのめくみの深き夜のあきの秋の夜の月
中臣祐臣
君か代のひかりをそへて清き夜の月に開けるみよそさき

藤原忠能

雨はれし霧のこるなる湊はみえん浦の有明の月

法下清孝

かくてきく袖の秋の色衣ときこそ涙にてうけし夜半也

大江経親

霜結ぶ袖のしのやの風さえてよにつきてやまさむからん

前大納言基良

わか袖にけさをしらつゆ色見えて峯の嵐のあきの今宵の月

源清兼朝臣

久方の月をみえて秋の夜は河霧もさえてくもる山の端

左中将永胤朝臣

夕風もさえていつくも世は秋の袖の夕暮のそらそうき

法眼元輔

風さへ秋をそてにそふ萩の葉風にみえてのこる世もなし
紅葉をも人の形見てみんせなれは

菅原孝標女

いつくもおなしとしらぬ物そつねなき秋のこころのゆふくれ

永仁元年亀山殿十首歌に幽居暮秋

前大納言實冬

世をいとふ柴の庵の霧ふかしさひしさまされ秋の夕くれ

題しらす　中原師宗朝臣

暮ぬる秋の名残をおしほ山麓にこそもみちちるらん

後近衛関白前太政大臣家哥合に朝時雨　高階成朝朝臣

明ぬとて峯にわかるゝ雲をなほのこして山は時雨けり

時雨　権中納言公雄

夕日さす光の森の梢にもかゝる袖にも山時雨かな

院御製

吹風のまもなき世をそほちて袖の時雨

人目かる時雨ふるよの庭のおもにたえぬ冬の秋よりそめつてき

時雨　前大納言基良

いかさんなひく末葉の時雨にはうつりて見えし秋の浪を

法印良成

吹さそふ風に山よりみたれ行雲のゆくゑにみえて山時雨かな

中臣祐臣

夕日影時雨る空の風よりもさきたつ雲の晴間の月

丹波尚長朝臣

空はるゝ嵐にみえつる雲の又きえてかゝる峯の山

法印貞底

さのみやは時雨かさなる山の端に村雲をつゝまそれの冬ならし

社頭月のいろをよむとて

前大納言俊光

神かきにたえぬ手向のまさしにも木葉よりもれ秋の月影

路落葉と

前参議為長

ちりまひしよりこそ道もいつくれて木の葉のうへをかよふ人

冬哥の中に

前参議経清朝臣

吉野ふる神さひまさる月の影さしそゆく雲をへたてしらに

前大納言為世

へてし明のこりうつりゆく月の影

春日社奉

前僧正道性

ゆくとしのかたみをかきれる花の色さしそ春の心のうちも

弘長二年亀山殿十首哥に寒蘆

前大納言為家

難波江やあさ〳〵霜のしたをれて水のそこなる冬の蘆原

土御門院御製

けさ見れは草の葉そめし霜の上におのかみさきりとおもふ

永福門院

あはれさも見しかとりもまほる月もよの霞

権中納言兼信

さしのほる月の雲間にかけしつまさに大かた月

しけしかも

見る人もなし

ら風やあらきしまかせにこゆるきの磯の浪まに千鳥なくなり

藤原範秀

満潮の浦わのひかたかれて浪よりうへに千鳥なく也

津守経国

いかにせん和歌の浦ちかき風も寄あまてなかりのこゑも秋

式乾門院御匣

昔みしへりやあつさ淡路嶋かたきこそあれも世のことはと

弘安百首哥めされける時よみてまし

亀山院御製

世の海やうらの千鳥こゑたてゝなにかうきねになれてなかりける

君か代のなかれりそく侍けるに性助法親王の

もとにつかはされける

首ありし今しかへらんのとつ君のおほきそ富みかへき

御返し

入道二品親王性助

たのもしな君か代の風をかけて寄るの浪思ひこそあれ

前大納言為世よりすゝめ侍し春日社三十首

哥中に

法眼行済

今は世にありそのはまの老の身のやまにたゝ法の思

弘安百首哥奉りし時

二品法親王覚助

古寺といふ事を前中納言為藤卿家にてよみ侍りし
題しらす　　法印浄弁
ふりにけるわかたつ山の峯の鐘そ世にはなれてのこるもきこえて
よみ人しらす
ふりにける大かたのころこそやこの寺の鐘の暁
燈火を　　前大納言為家
消えしてたのむ灯火はさしもまことの光なる國のうき火
歳暮の心を　　前参基任
老となる惜しさも共にくれて行年の暮そ悲しき
嘉元百首奉りし時　実兼

津守国冬
ゆくかう年はかはりもやらさ也をしりてもしらてなほ惜しむらん
題しらす　　従三位氏久
暮れはてゝ年をしるへく萬代のいつはりの色の春にあふかな
嘉元百首奉りし時　歳暮
二品法親王覚助
かへるさの山こそ物もなき二葉の鐘の声かきりなくもくれけれ
弘安百首奉りける時
前大納言為氏
今は身のおいにけりても頃につもりきは老の年もたかくて

續千載和歌集巻第十七

雜歌中

弘安百首歌めしけるついでに

龜山院御製

あつまりの光ながらの里の秋よりもなほうきこゝろはおもひいりけり

山月といふことをよませ給うける

法皇御製

なかむこゝろや山の秋の月二十とせ世をてらしけるかな

百首歌たてまつりし時

權大納言定房

さすかまたすみしとおもふこゝろとはいへこゝろや山の月やみるらん

題しらず

入道前太政大臣

ゆくすゑのみちをもさへおもはてたのみて月をみるかな

前參議能清

住山月はさてみるかけのおもひれのかつら峯に月やすむらん

權中納言公雄

見るへきの袖に涙をかけひとく月しみえぬよるかなしかり

弘安百首歌めしけるついでに

龜山院御製

あはれさを歌に後やまかりける月の神もてくみしやるらん

題しらず

宰相典侍

うきかけハこの世ハさても十寸ミ鏡の神代ハ月のかゝりけるかな

前僧正實賢

ちかひおけりそのかみ六十あまり老の後の秋の夜の月

太政大臣室

君か代をさそなくさめてや数ならぬ神世にて月の影やつきせし

権僧正道意

有明てふたゝひ住へき世をしと思ふる月ハ山にそ道

清天門院師

あらて世ハ身にたのまん世の中さためてハ山路の秋の夜の月

後法性寺入道前関白内大臣の時乃歌合に暁

月

藤原顕仲朝臣

山の端にいそきないりそ有明の影まつき身ハたのむ世の中ハ世を秋の夜遠情許しよかん三日

如願法師

世を秋の山のあらしのはけしきにいそかぬ雲もはるゝ夜の月

月の歌の中に

圓光院入道前関白太政大臣

ちりまやとかくる山の奥すみて友とそなるへき月の氣ハ

山里にまかりていそき読侍とて

従二位氏久

住よしと見えハこれしかりの世を出て捨てゝ我にはならし

前大僧正道玄無動寺にて千日の山籠して
侍りける比よみ侍りける
源兼氏朝臣
いかにしてかくれすまし世のうきをきかぬ雲のおくの峯
かし
前大僧正道玄
みやこへはいてしとおもふ籠くゐもこのさとの杉をとくすて
題しらす
廣義門院
そのかみは人のかきをきし庭のおもはしはませてそこなる
庭の松を
前大僧正道昭
世にふるはしられて庭の松にたにことさきの山のつりと

離山の後寄松述懐といへる
権律師浄弁
何ともまたおもはし山にすてゝすみぬる山にこのくらゐ
題しらす
よみ人しらす
何事もなきせのなかの事のはをまもりすてゝきみかたゝ
内裏にて侍りつるしをりしにをれ
九条太政大臣
涙ふる庵はしはのうちにつけしり山里は袖もまたしも海となるらん
歌合にそへいかりの柏よめるに付る
前大僧正實尊

思ひきや草のいほりの秋をさへつゐの栖と契るへしとは

述懐を　了然上人

きえとこそいのち山風清からぬ身のうさ世にそふり

嘉元三年卅首歌中に山家嵐　前大納言為世

山ふかみ松ふきしほる嵐そきかしと思れとむそ吹まれ

二品法親王家五十首歌中におなしこゝろを　法眼静澄

峯つゝき松の梢を吹おろす嵐もおなし谷の下ふし影しけし　宗厳法師

今よりは山ふかくしも庵しめてうき世といはゝ程の見えなん

洞院摂政家の百首歌に山家　藻璧門院少将

山ふかくとふ人のすみかとて草のとさしもたれかさゝん

おなし心を　法皇御製

尋きてみるへき物かすむ人は岩ねの松のふかき庵に

宝治百首歌に山家嵐　衣笠内大臣

吹くらす峯の風をもわきてきく嵐の峯のおなしかたなく

後光明峯寺前摂政左大臣

山家を

世のうさのさそひもきてはなれにし住家なりけり山の奥の秋

津守国助

山里はなかるる水とはせきも入しらまくの心のみすむところなれ

法印良宗

住なれて後も心のかはらねは猶山里しつかなる世なりけり

権大僧都良雲

山ふかくうき世のかけをそむく人の後の世ふかき花のしたみち

延政門院一条

住はてはみてはうき山里をとひきせてくる人やなき

入道親王尊圓

山里のさひしさになれはとふ人もなき庭の露のかきね

平宣時朝臣

山ふかき人の住家やたれならん苔にすひる岩のほそ道

惟宗時俊朝臣

やまかけや誰ともしらぬ庵にて猶かしこき庵の苔のした道

寛元三年大外記にまかりてよみ侍りける

中原師員朝臣

昔にもこの世の中をや晴ならんなかとて心のあけの夜に

西園寺入道前太政大臣に結縁の為にとて

前大僧正慈鎮

たのしみなれ

ちきりしさとつかへんかきりなし神まもることのはにあまるなきこれ
めし
西園寺入道前太政大臣
神代より二わかれさくなかはの国さためし
皇后宮母となりてかゝる時なりけれは
陰明門院
ちとせまてちきる月日もかはらすと
ぬらし
皇后宮
あきらかに月日はてらすひかりをもたえぬことそ世の
土御門内大臣久しきつかへをそへて君か代の
けりのみ侍りて
大納言實國

ともさためしやまたも長承たまハたまて都すさと
光の後こそかくそ侍るとその跡てまつりてさと
りなれと
清女納言
君か代にあひをとちそミてみそれとおもひて
忠義公かゝる葉をあつめてわかれをしのひて侍
とそ思ひなれ
左近大将朝光
今日ハあらたにかみそれるまのたまつゆのためなり
近衛大将おなし時なきてかの海のあかつき
山階入道前太政大臣
これをそれかれハそし秋の霜もわかれの形見とこそハ

嘉元百首奉りける時田家
太政大臣
秋の田の門田のいほに消てともしなき世にのこるらん
述懐の心を
法印栄英
住にける月日はいくよ早川老の波のみしほしみなけれ
従三位行能
新たにかくしもつかへてこし身なれはこれらの法を神よりけりて
今もうれしき道の法はわすれつゝなにはのとも
入りかゝれて人ののりこえつらし分
紫式部

四方の海に浮ふわたりの舟のとまりもさためなきたゝよふ
題しらす
うき世にはおもひ出てある身のこそ命をそさためおもはむ
相模
命をもおしと思はぬ我身にもきしかたのこゝろはなりゆく
藤原隆正
かきりある命はさすかをしくもてこれもあはれなり我身に
法印俊誉
平行氏
いさやそ世の中にあれかし年月はさもあれまたて命なかれ
前大僧正道玄よませ侍りける百首に暁述懐を

法印雲忠

深山にて世すむ明月もうた我つらうきと思ひしり
影しらん

法眼紹巴

うきことハ分ちてまつ命の老の後こそおもひなりけれ

菅原利行

前にてとふてハ我し老の身のよそにつまくらまさ海ハ

丹波長綱臣

なれしや今ハ猶の命とそてやそらなきもの身をし知りけん

権中納言公雄

見る人も絶え思ひ世の中は十かさらハさそてし一面来は

嘉元百首歌の時　述懐

昭慶門院一条

あはれなるさの心にうらむ世をのミ今ハ生ていく人たのしみ
影しらん

津守国冬

何事もしる分をさりてさまよふこの世をや我まさしらむ

菅原長経

さりとも未練の心をすてしいかてうき世の命なけれ
うれえ人まちん

惟宗邦政

物の哀を見つゝ思ひしらせ世にうきなからも年のはて

嗣そゝをすまあらて被仰をも命にまかせぬ身には

前右衛門督基顕

おもふや年をかさねくらしつる身のゆくへそのあらはれ

春宮権大夫有忠

たてまへ行末をはるかにたのひはたすけてこの身を歌に

嘉元百首哥奉りし時述懐

民部卿實教

年月のうき身をかへりみにそれはまてさそやまさまし

おもはし心を

遊義門院

無く世にすむ命しおしからへでこの身の年をふるね

天台座主慈勝

これまた世にすむ猶の思ひとしのひてそこの歌をこそ

平宗宣朝臣すゝめ侍りける住吉社二十六首

哥中に述懐

法印定為

数ならぬ世にすみのえにまつ我身の津の浦にあまのつり舟を

述懐哥の中に

前内大臣公

おさまれる世をしも思ふいかなる数ならぬ身もかくしつる

平貞宣

身にのうきはたのまてやらぬかひし人の世をすみかぬる世に

平政長

なけれはなをいふにはまさる後の世まてはなかりけり

度会延誠

かくてよにありきとたにしのはれは名のこさむと身におもふかな

平氏村

いきて今うけくるしみし後の世といはむもそれもさためなき人

よみ人しらす

うきみよ後の世まてもかけくるしき此とつく人こそはまし

源親教朝臣

いかならむ今まて頼みこし後の世をうき世にて我身を

後光明寺前摂政左大臣

年あまりの三代まてわか名続てなほいにしへにまさる世もかな

百首哥奉りし時　前関白左大臣

代々の風たえぬをこそつたへつれひていまはさてもさかゆく

題しらす　中臣祐臣

世に居らむのみそれは吾身かな子孫まてにもしるしとそおもふ

百首哥奉りし時　前大納言為世

行きて紀にいへまさるとものをそへのかならすも寿のうたの道しる

述懐の心を　中原師宗朝臣

ときはなる名のみそとものこりけむ代々の玉川さ

寄島述懐といふことを

源有長朝臣

あさからぬちきりやよそのつるのこゑ一声なかく
きゝなれて夢の枕覚めぬるのちは夜をとふへかりけるかなさ
影しらん

前大僧正守誉

あさのみか枕覚めてもつゆ覚えぬ夢のよに
あるたにまちかねしは夢のいつかさめなん

法印俊誉

前大僧正寛兼

法印良栄

あさからぬ夢のあとにもうき世なる覚めて枕の覚にそ思ふ
まよふみち夢の覚めぬる

法印円伴

明のよの夢の枕にさめてのこる思ひにあかつきの空

権僧正道意

さらぬ夢はいつしかさめて覚めぬまのなかきよの夢に枕

権僧正覚円

世をすてゝ夢のうき夢の覚めてこそおもひの枕の夢なりけり
有大覺而後知此其大夢なりとしるをと

大宰権帥實香

夢なからむかしの人のこゝろにもなほ覚めぬ夢のいつかさめなん
往事如夢といへるをと

法眼行済

こし方の思ひそふも夢なれやうきをわすれぬとしの跡しらん

太政大臣

百首歌奉りし時

おく霜の髪にいとしもかゝるかな六十ぢあまりにつもりつもりて

二品法親王覚助

身のうへにつもれるとしのいかはかり老の霜にや髪ぞみえける

日吉社に奉りける百首歌の中に

猶のみと友と頼ていく年も祈るかひのもとつせの山しらん

前大僧正慈能

権少僧都毅俊

咲やらて春しにはかゝらぬひともおもへばいまはなけかん

太宰権帥實香

かくなからいかにせよとてきえやらて我ほとそたち身のなそ

沙弥保能

我もいま老の行の世をしらぬかゝるなからへて身をたのむ哉

百首歌奉りし時

前関白太政大臣

これしても君かためとそつかへこし今九重の庭のしら菊

昇殿をのぞみて人のもとにつかはしける

丹波長有朝臣

世にとてもかひなき身そ雲のうへにまよひたちぬる道を知るや

題しらす　　従三位親子

舟人も宿もとめけり夕されて野島か崎の松に吹風(き)

従二位頼氏

住侘てたかねの松はしけれとも[illegible]

寄道祝といふ事を　　前大僧正道昭

法の風[illegible]雲に[illegible]嵐とともに[illegible]

弘安百首歌奉りける時　　前大納言経任

今の世まて君にあふみの鏡山[illegible]

嘉元百首歌奉りける時　　一条内大臣

立かへり[illegible]

百首歌奉りし時　　関白内大臣

さらに又[illegible]

中納言為俊[illegible]

前大納言俊定

嘉元百首歌奉りける時　　前大納言為世

八幡山[illegible]

国まりて世にはかゝるためしもなき名残まてある関の藤川

権中納言公雄

ふるさとの清き流の絶すしていくよとゝめし川の水

逢恋の心を

亀山院御製

津の国の宮のまへなる世の中にたえぬ名とそ人のうらみん

前僧正公朝

かくしもあらしと思へは世のうきに袖の涙も恋しき名

寄瀬逢恋といふことを

法印禅隆

淀川のきせとよりてやなかれけむうき名をたてし人に逢見ん

嘉元百首歌奉りし時

前大僧正道玄

さみたれやをちかたと宇治川の瀬々しらぬ恋のやまとにて絶むまはよなき

前僧正道性

引ぬる事の絶まなき恋の川さらに関せぬもなくなく物思ふ

源貞頼

こも枕たちよせて恋ふる河舟のつらき心に逢はさり

参議雅経

年ふれとなとひつるの奥は川ともよせぬ浪のかゝるなそなき

新後撰しはてけるか

平貞俊

陸に公ありしはまれなる事にてけふはわかの浦人
為世卿の門弟にて式部卿親王かへり
平貞時朝臣のとき世にかくれなき者この道の
師範たりし人々をとゞめし時歌をさかりて帝も見ん
侍るわか浦と

藤原景繁

このたびあつめし名ある人々のうたの浦波
前大納言為氏續拾遺えらひて後石山寺
まうでにまうせ侍る御中に

惟宗忠景

和歌の浦に今日ひろふ藻塩草光の数よりもまれ
題しらず

惟宗忠宗朝臣

りはまのかひあるはわかの浦ならまつ世をへてこそのむかし

藤原業連

世をかかるこの浦のうき草にまよふ身をまぬかれてこそ

度會朝棟

ゆく末の名をとゞめえてかしこくもあまの拾ひたるのしわざ
玉葉集に名をかくされけりしことを
同じ

權少僧都能信

わすれぬる名をしのぶこゝろはくみそめて神もしるらむ

一　津橋寺といふ所の柱にかきつけ侍る

常盤井入道前太政大臣

たてそめしちかひもきよき橋柱かはりてやよの人へわたさん

かの橋をしるし所浩水にこそれくつれいかなん侍る

順空上人

むかし人の渡世のためし橋をしも所もせきとめて今もなほて

弘安百首奉りける時

民部卿資宣

あさき世ふかきみなかみの橋をしら瀬のかはらの人

影しらん

権少僧都實誉

年月はふりぬるの大橋のはしら思ひそめて世をやわたらん

藤原隆信朝臣年久しくありて後殿上ゆる

されけるに時よみつかはしける

後徳大寺左大臣

いかはかりうれしかるらん老の後にて又わたりける雲のかけ橋

返し

隆信朝臣

老の後にて又わたりける身にしは今日なかそそはかられき

續千載和歌集巻第十八

雜歌下

題しらす　　中納言雅忠

世中はたゝなにとなくてすきてあられ有にかゝりもゆく哉

よみ人しらす

思ひやれ雲井の秋の月光を袖のうへにくもらして

圓光院入道前關白太政大臣

いにしへの名残や我は偲はまし月にむかしのなきかよせし

月催懐舊といふことを

前大納言資名

思ひいかゝたるし月の面影やたゝなみたまてのしつめならん

惜月といふことを　　近衛關白前左大臣

むかしより雲井出て高嶋の秋のりの月にかやさえまし

位におはしましし時七月七日に題をさくりて

百首歌よませ給ける時對月思昔といふことを

よませ給ける　　後二條院御製

かゝ見えつ秋し昔をおもへとも月そへたつるかたみなりける

西山に住侍りけるころよみ侍ける

慈道法親王

すみなれし宿の月をみるやかて雲深の秋

題しらす　　　雲禅法師

いく秋かかゝる月のやとるらんおとはせぬ身の庭のおもかけ

紹運法師

見るまゝにふけ行空のこゝろより月雖はむかしの秋かはらねと

法印玄守

何ゆへにかゝる友とや涼人月はむかしの秋を思ふらし

西園法師

見れは先涙流るゝこゝろ世はいつまて月のひとりまちえん

夜中思昔といふことを

園光院入道前関白太政大臣

昔さへ老の涙はこほれしを我身を秋のさそひけり

惟宗忠秀

題しらす

いにしへの野中の清水手にくみてひとりそ袖はぬらしける

法印顕範

行年は六十ちかくなりぬれと風寒く老のなきことそかなしき

丹波長有朝臣

今はゝや八十あまりの友の形見とも見て世の事をたのまし

円光院入道前関白太政大臣

何となく昔はかりもなくてたゝとこそ老のこゝろは

人々に五十首歌よませ侍りてゝ

後鳥羽院御製

忍ふらむむかしの人の面かけはさそひしよりもわすられぬなり

懐旧の心を　　前参議雅有

ひとりゐてきくもいひしもなき人をおもへはかなしかりける

独懐旧といふことを　　藻璧門院少将

われたにもきく人もなき心のうちのしるしかるらむと

思ふらん　　天台座主慈勝

数ならぬ身ひとつにのこるおもかけをたれにかたらむ人そなき

絶えてし方の末をしはし川を我身のうへにそ見る

岩蔵姫宮

昔人はこの昔のことをしのふらむことを身に知る人まてはなかれぬ

源盛徳

今更にしのふむかしのもとをかへり見る世もそはれなるかな

祝部貞長

遠さかるむかしのことゝなりぬれは思ふこゝろもあはれなりけり

源慶有

かくてのみおもふにかなしき身になりぬものおもひもなかれぬ

圓光院入道前関白太政大臣

なけ海の松と海のかんにおもへてもしとたえし沢のかなん

深草のわたりにまかりて夕時鳥をきゝてよめる

侍りける　　民部卿實教

追へこし有りせは深草の里はいかにさひしからまし

跡しられ　　祝部行氏

武士の道は今なから世々の古の跡はかはらて変はらぬそなれ

二条法親王性助

なかきよに変はらぬ行末をまもりてそ治まれる世の思ひなれ

伏見院に三千首奉りける時

伏見院新宰相

長きよを神代の鏡にうつしても変はらぬ影の跡を

極めける　　平秋時

ひさかたのあまてる日のかけのみか妻のゆかりのひかりぬらん

題しらす　　行蓮法師

うきて世には月日立道の外に今日毎にあたらしき哉

うちつけに物そこそ世をたかくかはらぬかけてやるらん

前大僧正源恵

題しらす

山高く世の中くさ友しなすかひてうきなをかくなそ世にはしらすも

あはすとも身をなにかせんいかにもとあれよりもまさるかな

前右大臣室

とにかくに世は長月のすゑなれやひとりしくれて身をかこつらん

明雲法師

はかなくもひとつうき世をいとひかね身をこそ世にはなとかくしつる

法橋顕昭

うきたひに猶世をかへむとこそけに思ふ身もとしの経ぬれ

平泰時

悟しへき世の中は佛にも教ゆる身をそ行ふなる

賀茂基久

かくてあらはきえにけりていとはれぬ世をなかなかにおもひやるらむ

平宗直

定なきつらひにたへは世中はやかてそいとひそむへき

源家重經

いとはしく浮世はいつと定めても猶世にのこるなさけなりけり

藤原頼氏

世の中のすてらるへくそありけるをいかなる身のいまゝてもへて

前左兵衛督教定

いとひしもなくてそ世をはわかれぬるいつもうき世のなかにすみける

中臣祐春

一すちに山の奥にいりそめて猶そすへきこゝろなりけり

源隆泰

うき世をはいとひてそむく人まても傍の心は山のおくかな

昭慶門院一条

背きてはすてぬ心にはうきこそ山の花の白雲

平時常

是そ其後とも今の世のうきことゝいはてそむかれ身なれしぬ

述懐の心を

権大納言兼季

ありてなからうき世中の夢の世にうつゝそむきて心そ覚え

院御製

世の中にかゝるよやさしなからへんなかりしとてしはかられ道

前参議雅孝

身をなからそむきて後も思ふ人心をさそふ世の中の宗

都しらは

示證上人

ありとたにうき身はいかゝやなき跡のこれよといひてのかれにし人

権大僧都厳敬

うきことも猶そむきても見えぬるはいつくをさらに身を歎道

平宣時朝臣女

今はゝや世をそむきて憂身ひとつの心のうきになりてそ捨ぬる

権大僧都定宗

身をそむくやみの風のみへはかなれしと思ひけん世をのかれて

嘉元百首奉りし時述懐　　　権中納言公雄

あしよきも見もきゝつくし世をへてそ心の奥はしつ
かなりける

またし世のうきしやあらんと今しはしのこる身なれは後の世も
おほやけの後年ゆるしありしかは世をのかれてと
く後の世しらぬそしきりにてはへりける

入道前太政大臣

いにしへの名をこそ人とおもひしに人の心はなほ世まての友とぬ
もし
よみ人しられ

いにしへのいさへ忘れて後の世の友ときゝてこそといはまし
き

題しらす　　　兼好法師

いかにしてなくさむ物そうき世をもそむかてすくす人にとはゝや

宗蓮法師世をのかれてときゝてつかはし
ける　　　後徳大寺左大臣

世中を出そそこらのうきたりしとそれしとそ身もおもふやと
もし
宗蓮法師

今さらにこの頃の身なる世を世とそそれともつきて
ましし

大原にまかりて草庵のはらとをさそこそ後

寂円上人へまかりつかはし

常磐井入道前太政大臣

うきにこそまくこもる山の奥もみつ世のうき時の宿りとして

前参議実俊かく家にて侍りけるにつかはしける

入道前太政大臣

はかなしや世をのかれつる隠家もいかならんと思ひしられき

返し

前参議実俊

君がためみちをもしらて思ひそめしこそひそかなれし

述懐中に

後宋入道前関白左大臣

いかならんつらき浮世の数そへて猶奥しらぬ山よりかすみ

弘安百首哥たてまつりし時

静仁法親王

老の身を吉野のおくの奥ふかくてうき世をいとふ道はまよひき

題しらす

平宗宣朝臣

おもひ入ておもひし山にきてみれとなほよりそらうき世なれ

順助法親王

いく秋をおもひ捨て物ゆへ心くるしなにとうき世の中をいとふらん

右兵衛督基氏

さらぬたにそむくの様なりの身なれとやなかなか秋は見なれ

二品法親王覚助

流れゆく我よのはての年月はなにの上にかきえのこるらん

藤原為隆朝臣

なかたえすまたえて月まを見し夜をてしいつの秋まて

権少僧都澄舜

七十の夏より後のいかならんなこりのみそ秋をしさ

前大僧正仁澄

心とは身ならすまかするならひにてうつりうき世なれとし

藤原盛徳

いかにて此月見さをあるましき身を物と思ふ世なりせは

前大僧守誉

世中はたのみしものをなりせはかはるとも思ひなれはなけかれ

身をしのふ花てや庭をなかしうき世そいつかいかなは世

式乾門院御匣

嘉元百首奉りし時

太政大臣

なからへはなかき身を見るのみやつまこゝろうつかはらん

影しらん

三善為連

わかつゆの心ありけんかたなきは身もしらてにかつきかりけり

よみ人しらす

世をわたるかけはさもあれとかくにそてふかしらぬ身のかきよ

中務卿具平親王

華ハ前ニ多ク見ツレトモ是ナル花作リ見ル人ノ形

續千載和歌集巻第十九

哀傷哥

題しらす　　後京極摂政前太政大臣

消そしいく世の人のおくれけん元にめくりの雲て霞し

百首哥めされしついてに　　法皇御製

人の世のならひときけとあはれなるの世のはかなさの雲のそらなるかな

題しらす　　覚仁法親王

涙こそ世々をもゆく落つる水の流のおりともみえてなかれ世

後鳥羽院かくれさせ給ひてきさらき御月忌始賀（如月）

我衆の日毎におくり侍りける通忠の母のもとへ

つかはしける　　修明門院大弐

思ひきやおなしひと金の風さそふおくれし涙のかゝるへしとは

色し

右近大将通忠母

かなしさのかなしさに涙そかはりなるおもひはまさる露しる覧

右大臣（于時権大納言）のとき権大納言冬基あやめの根

とおくり侍りけることを思出て後の年の

年五月五日孫にそへつかはしける

円光院入道前関白太政大臣

あやめ草我命の長き孫にまた孫をそへてくらへつる袖

也し

右大臣

枝をかはすこそのきの孫と残しても百よりかたみの世々をへし
影しらん

大納言師氏

わきそめの家に命をとくる里は花のかひあるかりなり

新院御製

槿の花はまちえよう人てこそん法ねかる世をとゝめし

永福門院内侍

みな月のさかひにせん来の家もなかれゆくうき世に

亀山院の御事をよませて

前僧正道性

思出の時をわすれぬこゝろにやしのふ其世の秋の面影

慈道法親王

秋霧のはれぬなけきはかはらねと月のおもかけそ見る

伏見院かくれさせ給ひての秋亀山院の御法会に
よみてつかはしける

昭慶門院一条

うき秋の霧にむせひておもひやる大かたの露も袖のいかに

前大納言為氏身まかりて後十三年にあたり侍る
時誦経のさゝけ物とらすとて

太政大臣

思ひをく家の言の葉たえすともなき人のうき別は

也し

前大納言為世

今さらにふせし秋の草枕きえても露のなをかはりき

身を侍りける人の許よりきりの袖のかはく人のもとへ

つかはしとて　　よみ人しらず

消えてし露の形見のよるの袂をなへてかはらぬ御製

亀山院かくれさせ給ひて後昭訓門院御方

に御さうしにある時入道前太政大臣のもとにつかはさ

せ給ける

伏見院御製

しをなき袖の露もあはれやまたに袖にとまるとゝろなき

伏見院かくれさせ給ひて其秋時人のもとへつかはしける

思ひたえてなれし御かけも袖にくらし山のおくの秋のなさけ

式部卿久明親王

前中納言定家家に住侍て後前大納言為家

嵯峨の家に住侍りけるにつかはしける

後鳥羽院下野

おもひやる心はかりは人の秋もかはらぬ君かもとにいかてと

也し

前大納言為家

見はやこそ心の本の花のめてし時なるさきの秋の山里

朝な夕な常に覚見思やりたりまてこそなれ

まつ山秋のさかの世の心をきこえ侍りしかは

ながめし寛喜元年たゝしはうちきみのゝ秋の歌に
伏見院にめされし百首に秋の夢をよみ給ける
新宰相
時うき人の秋とそ思ふ秋の夜は波の上にもさそはれにけり
安嘉門院にめされし百首によみける時月の心をよみ侍ける時
夜の思ひけれは
前権僧正教範
時まてし波のうへの夕附夜みさをゝ見よと神たのみつゝ
前大納言為氏
月見ても昔の月の夜にこそありけれ
おもひ侍るに津守国助がよみて侍る
法印定為
いかにせむ志ゐてひとりおもふ秋の空もかな月のなかに
京極院にて侍りし時寛元十九日九月尽によみ給ける
よ御代事の同しくも御ためかはらぬ空の
せたる
前大納言為氏
わかれ行くは惜しき秋をおもふて秋にいひたまの月をはかなくも
毎月おもひて後みえける
賀茂遠久
立よりて時をし志のふ社のはるの秋の
入道一品親王深性にめされし百首の歌の中に秋の歌前大
僧正禅助よみ侍ける

法印行深

おしき今日数ハ秋もくれぬるや霧ハあまたの色そめにけり

平貞時朝臣身まかりて後廉のかへりきて

平宗宣朝臣

今日ハ又なき別をとふひてや秋より後も廉のかゝらん

藻壁門院少将身まかりて後人の夢にかくてあ
教ひてはなきさへをも鳥ちかそひのは
とやのうへとまりん御前の花と年の何侍人
く見しにえてくまれせ侍りけるに

山本入道前太政大臣

さえかへる世のゆくへしの友千鳥すゝみしよハの夜かよふなり

左近中将定長身まかりて後子はらひけるに申侍
りし前大納言長雅のもとにつかはしける

前参議雅有

今世には身ひとつのみしきハ別しらぬのやミ路なりけり

朱雀院くれさせ給ふての比

源信明朝臣

かゝりしの月日まゝに今ハ我身ひとつにさらに侍り

今ハとてかれてもかん侍るかな

まかん人あらん

さこれぬくなきくたゆとを出てわかれひとりやなにを思ふらむ

俊恵法師わつらひ侍りける時つかはしける

大宰大弐重家

世の人のやいかにおもふも世の中に別といふ名はあらしとも

返し

俊恵法師

いかにせむましにわかれをしる人のかなしさを思ふらむ

ある人をともなひて

前僧正道性

面かけをこゝろにのこし思ふのみこそ人の形見なりけれ

返し

前大納言忠教

あらましやこれは人とおもふそかなしきにこそ

前大僧正源恵

後の世をたのむこそわかるゝとこれはあはれなれ

智道上人身まかりにけるよしきゝて

従二位氏久

わかるゝ後の世のわかれをきゝて世をのかれすむ人そなき

平貞綱母身まかりける時よめる

平貞房

ありし後とはわかれの面かけにたちそふ人のかはらぬ

後近衛関白前右大臣身まかりて後人のもとへ

源兼胤朝臣

申つかはしける

しりしそらもこゝを旅たゝれしかは見えならてのちそてかはかしさ

題しらす　慈寛法師

あはれなる色そ消えぬる月のまへにさそはれ出る世のならひかは

うき世をまつ人を夜になるなく

大江宗秀

さみたれはやみて波のみかゝるにくれぬるあきか夜のあけて神は

題しらす　権僧正憲淳

風よわるまゝに露はむすふ大海からの人のそまてかへるなる

母の思ひに侍りける比文まてことゝはれ給ひけるをおもひ

出てよめる

津守国冬

よしさらはこれを限の浪よりもあまの別の袖のわかれを

無常の心をよみて　権僧正覚円

きえやらぬ世のはかなさはあさかほのさきてはあすをまたぬ身そうき

なき人をと見しは世にも

権大僧都忠性

なにしにあはましかはと思ひしそ今はかはりゆく

平時常身まかりて後つかはしけるに

文のみそ跡をとゝめてありし人のかたみとはなれ

平氏村

色なきものよの苔のしたにしるしあれはとふこゝろそのあと

従一位貞子身まかりにける骨をとりて霊山にまゐり

侍らでよみ給ける

法印憲基

行さきの道しるべとて高野山これを別のはてとこそきく

後二条院御忌の程に人々十首歌よみ侍

り

法印覚守

見しゆめさへきてあはれとこの比の煙をそことなくやはせし

歎しらん

式乾門院御匣

鳥部山たえぬ煙のうき雲やかゝるも数そふ煙なりけん

三条入道内大臣女身まかりにける比

式部卿久明親王

立のぼる煙も雲に消はてゝ涙の雨ぞなごりなりける

近衛関白身まかりにけるほどなく

高階家成朝臣

身にかへてとむらふ人のありとせばつまこそこひの煙なりけれ

藤原行経女身まかりて後六字名号をかきて

ぬきをさして許とよみてそへ人につかはし給けるに

くもまよりみえざれとつかはし給ける

蓮生法師

わかれぬるさきの命にあはぬ色をかゝるうきひの雲とおもひし

弟子みまかりておくれて歎侍ける比法常の心を

前大僧正道昭

まよひくる人〳〵ともそへてしつらき世にのこるかなしさ
平貞時朝臣身まかりける時人のもとへつかはし侍る
しける
藤原重経
そのかみに思ひしよりもかなしきはうき世のみちの
たのみて侍ける人の身まかりて侍けるに文
つかはしけるかへり事に家のあるしみまかりにしと
心をくもへて侍ける人のもとより返しにかくて侍る
返し　よみ人しらす
いまはとて後のわかれのかなしさにひきかへつゝも涙のみして
観意法師身まかりて後服ぬきける日よみける

前大納言基任
立かへる時はありしに墨染の袖ほさまし
母の身まかりて侍ける時服ぬきとき侍りける
なれし
左大臣
ことしはきく人もなき御ことにもそれかと思ふにけさそ
後宇多院御服ぬきて又の日よみ侍る
常盤井入道前太政大臣
ぬきかへつ神のみまへの藤衣身にはそのまゝ露はきえても
贈従三位為子身まかりて五七日の仏事に経を
とりかさね侍るとて紙かうきに付侍りける

行遍法師妹

みそらゆく月も今夜は涙のうへにくもりぬや涙の霧にへだてられけん

昭訓門院春日

ひとめくとりて涙のうへに見るやとて心ゆくらん雲のかよひぢ

為道朝臣十三年の仏事いとなみ侍るに

涙のそこしく隠蔵のころもを

藤原宗秀

わすれずよそのかみ山の名残をもあはれ昔の夢にみえつゝ

平時村朝臣身まかりて後十三年の仏事をいとなみける時よみて侍りける

平時仲

いまはとて世にわすれぬ人ぞなき君こそ神となりにしかども

亀山院十三年の御仏事の比母の十三年同年月にあたりけるに思ひつゞけ侍る

前僧正道性

ひとゝせにかさなりぬる悲しさは十とせあまりの秋の三とせの秋の露

藤原雅行身まかりて後叙位に加階志侍りけると中都より人のもとにて侍りければ

前参議雅有

思ひきや世にありてこそ位山ありてきくとも甲斐はなし

續千載和歌集巻第七

賀歌

寶治百首歌よませ給ひける時寄日祝

後嵯峨院御製

久方のあまの岩戸のあけしより光朝日とさす時なき

嘉元百首歌奉りし時

一条内大臣

民やすく国ゆたかなる御代なれは君をそ千世といはふなりけり

建保六年八月中殿にて池月久明といふ題を講せられけるによみ侍りて

順徳院御製

池水にうつれる松の影よりも月そ千世の影やとすらん

土御門院御製

祝の心を

契りてし千年のはとうゑき玉椿けふやちよの世の千世の百年 行をよも世をすくさん

後二条院御製

なかくしくやをさまる万世を見て庭のくれ竹

圓融院御時紫野にて子日侍りけるに

法成寺入道攝政太政大臣

ひきて人もなくて千世をへにける老木の松のかはりやせん

嘉暦二年内裏後番歌合に子日

前中納言匡房

冬まけハ子日に松ひきつらねて匡を二代の君をことよせて

歎しられ

大蔵卿有家

ねの日せし松の千年のかさね縁ゝ毎のけそこの林

子日を祝と云る心をよませ給ひける

後□御製

松かえて千よにとひの末の千世の君に百の子の日に

文保元年正月當りける日御方たかへ西園寺入道御幸侍りて次の年の正月同く御幸侍けるに又雪のふりけれハ去年をおほしめし

おさせ給ふ入道前太政大臣のもとへつかハされける

ふりて見るハいつまて昔のふることを祝そてこそ我の初雪

返し

入道前太政大臣

ふりつもる千世の雪にて年よみ君か百年

行幸を

伏見院御製

玉しきの庭の竹のいく千世しかハ雪の行幸の跡

乾元二年二月内裏にて竹遐年友といふことをよませ給ひける

萬秋門院

萬代のためしにこもれるみそのの竹の一万世ちきる

大内の花の陰にて人々侍りしに
前大納言公任
留むとかくらの花に心へてもいく世のはるかしらぬらし
建久元年五十首歌中
前中納言定家
千世まての大宮人のかさしとや雲井の桜にほひそめけん
永仁二年内裏にて三首歌講せられ侍りしに
庭花盛久といふ事を
左大臣
ことしより御世の初の春よりや雲井の桜うつろひもせし
園光院入道前関白弘安八年三月さ太政
大臣に成て侍しに内裏花に付てつかうまつれる
伏見院御製
時ありてくさ木も花さく宿ならし今あまたの
これもし
園光院入道前関白太政大臣
立かへり老のたのしや宿にうつりしまことの時にあふそれかん
正慶二年関白詔かうふりて五月宣下をうけて参り侍りける
後近衛関白前右大臣
咲そめしむかしの春やかへりけん今もまたそのよをそめてけん
これもし
後伏見院御製
あやなしなひきうへてしのふかなつきぬ世を春のためしにもこの花

禁中の菊を　　後京極摂政前太政大臣

菊の花のこころみ瀧水そ世の秋のけそら川まる
そのかみし奏つかまつりてまけひとしよろこひかな
こはしも出を入て嵐の秋さす松虫のよるを小野宮
右大臣よみて奉りて侍りけれは

円融院御製

今や旅りまかりつる松虫の一夜はかりとこそえてなくらん

寛治百首歌よみ侍りける時秋田

前大納言基良

風のたつみの菊の葉もとしふれは露かさねてひく千代の秋まて

文治六年女御入内屏風に山中に菊盛なる所
家ある所過仙人の来訪所

前中納言定家

ぬれてほす山路の菊の露のまにはやくも千世を経りぬらん

鳥羽殿前栽合に菊を

藤原顕綱朝臣

君か代は菊のしたゆく岩水のなかれとともに千世そ経ぬへき

弘安七年九月九日三首歌講せられける時
菊花寄久といふことを

亀山院御製

千世まてかきらぬ秋はさりともそ月日の世の萬葉風にうつさ

位よりおりさせ給ひける時同く世にまかる

法皇御製

河竹のしきせたりあとに残て今日明らかに百年の花

法性寺入道前関白内大臣に侍りける時家哥合に

藤原顕仲朝臣

萬世の秋のかさしに折る花は君かよはひそのなかさをきく

崇徳院位におはしましける時宮庭樹菊花と云事を

ことをよませられけり

皇太后宮大夫俊成

百敷やうつろふ菊の枝ことに君か萬世の色をそへたる

寄神祇祝と云事を

前大納言為家

かすか山松の風のたえぬはためしきこゆ万世の一声

題しらす

法性寺入道前関白太政大臣

此君の位の山しるされはまつ人あふくためしとそする

今上位につき給ふ日夜の参り侍るに付て

のころにて宮晴れまれなる事に思ひてよめる

女蔵人兵衛

あきらけき御世そうれしき位山まよふ人なくなりてけるかな

正和三年二月廿日社に御幸侍りしとき従三
位に叙せられ侍りし時よめる

中臣祐親

年ひさしき君か御幸にあふ山まつのかひある峯にさかえつゝ

春日百首歌たてまつりし時山

前大僧正良覚

千世ふへき君かためとやみかさ山今もしけしに位そへしこと
茂しらん

従二位為信

君か世のかきはときはく亀の尾の岩ねよりたに出る瀧の白糸

小弁

君か世をいはふは亀の尾の岩ねの松に苔むすまてく

性助法親王家の五十首歌に祝

入道前太政大臣

今も又ちよのはつ山の峯の松たえぬけと風かよふなり

百首歌めされし次に

法皇御製

あらたまることの葉の今も萬代のいくちよかけしのちの松

吉秋のかけとやうへて見つらかすへらきのまもりかけ

宝治百首歌たてまつりし時寄日祝と

前大納言基良

かりかきみよのひかりハかくれてそのかけしのをぬれ

百首歌よみし時　前右大臣

曇なき月日の光り君か世のたくひなるへき千とせまてとも

嘉元百首歌奉りし時詠

前中納言為方

月に見てひかりをそへてあまてる君かみよそたかさすてまてに

影しらん　平貞時朝臣

あきらけきひかりそうつる君か世のことあまねく秋の夜の月

為君祝世と云ことを

前参議雅有

しき秋のかはらぬ世をもうけつへき君かたのしみ川の流なり

文永三年三月續古今集宴歌

前大納言為氏

和歌の浦にかけける玉をひろひおきて今の代数をとゝめ

後法性寺入道前関白右大臣に侍ける時家に

百首歌よませ侍りけり

太宰大弐重家

世々を大君を見てそ君をみん菅らなるさゝら川の水

文治六年女御入内屏風に江澤のかたかきたる所

三つの霜之

前中納言家

行末はさてよの君かさゝれ石の苔むすまてに露の毛衣
百首歌よまれし次

法皇御製

契りおきし君か萬世の友なれや竹田の原の露のかゝる色

嘉元百首歌たてまつりし時読

前中納言為相

老の後みるものよひのまつとて千年一万世のかそへつくし

村上御時天慶九年大嘗會悠紀巳日參

入音声鏡山をよめる　よみ人しらす

日の光みちよの月を鏡山世にあふ時はにこりなきさ

堀川院御時寛治元年大嘗會悠紀方風

俗の歌千松原　前中納言匡房

とよのあかり千の松原の松風もすゑこそちよのためしなりけれ

大正四年四月十九日

秋山定輔